

第2回 RYLAセミナー報告



LET SERVICE LIGHT THE WAY

もくじ

発刊によせて

RYLAへの感謝	中島 源	1
青年よ使命を	多胡 楠 裕	3
セミナースケジュール		4
講演 I		
世界の孤児日本にならないために	秦泉寺 正一	5
今日における青年と大人との関係	田中国夫	9
グループを指導するために	今井 鎮雄	16
講演 II — 経験を通して —		
	八尾 芳樹	21
	鍬方 志郎	26
バズセッションより		30
参加者感想文	各グループカウンセラー	33
	受講者	
参加者名簿		73

発刊によせて



RYLAへの感謝



R.I 第267地区ガバナー

中 島 源

前年度に引き続き本年も青少年指導者養成セミナーを第267, 268地区合同で開催しました。これが計画指導については、第268地区多胡カバナー、神戸西R.C今井鎮雄、伊丹R.C深川純一の先生方の一方ならぬご協力によって予期以上の成功を収めたことを心から感謝しています。

青少年の健全な育成について、ロータリーでは重要な奉仕部門として、各クラブでは青少年奉仕委員を設け、深い関心を払い各種の奉仕活動を行っていますが、ともすると形式に流れ、ロータリアンと若い人たちとの心の触れ合も少なく、活動が停滞しつつある現状に鑑みまして、地域内の青少年活動に新しい活力を与えるためには、優秀なリーダーを養成することが最も重要であることを痛感しまして、先輩である第268地区との合同で本セミナーを開きました。

地区内の各クラブの青少年委員会からは、本セミナーに対して優秀な青少年指導者の推薦があり、講師の先生方も各分野の権威の方々が引受下さいまして、香川県小豆島のY.M.C.Aの余島キャンプで立派なセミナーを開催することができました。受講の人たちは3泊4日間をキャンプ内で起居を共にし、討議し、思索し、談笑して、お互の心と心の触れ合いにより、友情と親睦を深め、多くの成果を収め有意義に終ることのできたことを講師先生、はじめリーダーの方々に感謝すると共に喜びに堪えない次第であります。

殊に本年度のセミナーの最大の収穫は、受講者の人たちが同窓会を結成して、お互の連絡と友交を深め、将来同志の養成に協力してくれることになったこと

とであります。

最後に本セミナーの開催につき特に出席協力下さいました、梶浦・執行両パ
スト・ガバナー並に小豆島クラブ並に各クラブの方々の尽力に対し深く感謝申
し上げます。



青年よ使命感を



R.I 第268地区ガバナー

多胡檜裕

余島には素晴らしい自然があります。私達の世界を少しでも明るくしていくために、若者達も、ロータリアンも、共に学び、共に遊び、そして共に心を育てあう場——。ライラセミナーを今年も実りあるものとして終了出来ましたことを喜んでおります。

講師の先生方より、広い分野にわたって学び、又参加の皆さんには寝食を共にしながら、実によく話し合っていられました。日常の自分のまわりとは違った、開かれた世界の中で夫々に会得されたものは大きいのではないでしょうか。私も多くのことを学ばせて頂きました。あなた方一人一人をこゝまで育ててくれた世の中の為に、我々の住む社会を少しでも明るいものとするために努力しようという使命感に、そして他者に奉仕しようという使命感に燃えて頂きたいと私は願っております。もしそういった使命感が皆さま方の胸中に残れば、私はこのライラセミナーは実にみのり多いものであった——と信じます。

カウンセラーの方々、運営委員会や関係者の方々ご苦労さまでした。このセミナーの熱意のこもった企画・運営と、参加者の皆さんのがみごとに調和したことによって、このセミナーが大きく開花したものと感謝いたします。

セミナースケジュール

4月3日		4月4日	4月5日	4月6日
8		朝 食	朝 食	朝 食
9			海の植物採集	
10		講 演 秦泉寺正一氏	講 演 田中国夫氏	講 演 今井鎮雄氏
11				
12		昼 食	昼 食	昼 食
1				
2		歌の指導法の 勉強	講 演 鍼方志郎氏	——離島——
3	オリエンテーション (ライラについて他)	講 演 八尾芳樹氏	レクリエーション ジョギング (HASH HOUSE HARRIERS)	
4	夕 食 (オープニング パーティ)	レクリエーション他		
5				
6		夕 食	夕 食	
7				
8	キャビンタイム (自由)	キャンプファイバー 親睦の夕	炉 辺 談 話 (バズセッション)	
9				

講 演 I



世界の孤児日本にならないために



JASEAN国際協力研究所長

高知大学名誉教授

秦泉寺 正一

木の香も新しいこのすばらしい会場の、トップバッターとして私がえらばれたことに、使命感を覚えます。

比較人類学のテーマのもとに世界各国を歩き人間の原点を、東南アジアを歩き、日本人の原点をたずねました。若い人はアジア人としての血が流れているのにアジアを知らなすぎます。アジア各地で「日本人は『チャリチャリワン』（お金あさり）だ」という言葉をよく聞きます。「日本は民族資源を使って繁栄したのに何ひとつお返しをしない。日本をやっつけるには民族資源を売らないことだ。」と非難されますが、何故日本が大戦後十年間で世界がびっくりするような発展をとげたかということは教えてもらいたがっています。連合軍の大きな間違いは、機械をとり上げたらもう日本は立ち上がりがないだろうと考えたことです。しかし日本人には明治以来營々として築きあげられた教育、知識がありました。外国の本を読み理解し、技術より種々のものをつくることが出来ました。連合軍は日本人のやせたボロを着た身体の中をみることが出来なかったのです。日本人の中に持っている潜在能力まで爆撃することは出来ませんでした。これが今の日本の繁栄なのです。物質中心の文化の中でシステムがあれば大丈夫だと思っている人々からは、アジア人の中にがっちりと意識がなされた能力が潜在していることは忘れられていきました。リーダーである皆様は子供に技術を教えてもそれは単なる身体についていた一部分でしかありません。一番大切なのは本質的な人間のよりどころを子供にどう与えるかということで、内

面的指導が欠けています。

世界の孤児日本とはどういうことか。バンコックの華僑の長老と筆談した時、華僑、夷僑（ユダヤ）、印僑（インド）そして日僑と書きました。この時筆談の奥にあるものをピンと感じました。リーダーにはこの問題を発見する感覚が必要ですが、問題発見と処理が新しい創造への糸口です。何故日本人の私に日僑と書いたか。外貨のない中国がなぜプラント輸入できるのかというと華僑が未来を夢みてお金を出しているのです。現在日本は東南アジアに輸出し、お金をもうけているが、あと5年もすれば中国は自力で物をつくることが出来るようになり日本製品は不要になってきます。その時日本人はどうしますか。祖国を失った日僑になった時あなたは何を売りますか。我々とまもなく同じになりますよ。といいたかったらしいのです。東南アジアの中心となっている若い人は、米欧州へ留学した人達で、日本へ留学していた人は大学卒とは認められない。その腹イセが日本人に対する攻撃となってかえってくるのです。日本政府が出たお金が裏目裏目になっているがこれからこれをどうしたらよいか。世界の孤児日本を世界から尊敬される日本にするにはどうしたらよいか。これが今日のお話の本筋です。田中総理とエリザベス女王の東南アジア歴訪をみてお金で買えないものは何かを考えました。金があれば解決がつくという日本人の考え方、金で買えないものは何かということを子供に教えてほしいと思います。金で買えないものは何だろうか。エ女王のとりまきの人達はよくそれを知っていたようです。人間の心と心のつながりを大切にしていかなければなりません。友愛と信頼のきづなこそお金をいくら出しても買えないし、そういう心構えがないと尊敬されないと思います。ロータリーがお金を出してRYLAをやるのは皆さんの中の心を友愛と信頼でつなぎ、その意識を子供の中に植え付けてもらいたい為だと思います。これから世界をリードするのはお金でも物質でもない人間の心のあり方ではないかと思います。

子供を指導する時、その発達段階、生から死までのサイクルを考えなければなりません。子供を原点に返して、子供の生きるすべ、生きざま、生きる心のよりどころを野外活動によってつかまえさせなければならないと思います。今都会に住んでいる子供に土の上をはだしで土と身体を接しながら生きていくすべを教えなければならぬと思います。

宗教的芸術的な目に見えない世界の中に、人間の一番大切な本質があります。

冬の間もみの中で寒さに耐え忍んだその準備期間が生命の本質であるのに、目にみえるきれいな花が現実であると思うのはまちがっています。目先の事だけが科学であり現実であると考えるのは間違っています。リーダーとして子供の為に意識の大転換をはからなければ、今、目の前にみえる物質文明にまどわされてしまいます。これから何を心のよりどころとしてリーダー自身が自己研修をつむか、そして自分が感じた大切なものを子供にどう感じさせ、受けとらせるかが大切で、わからせるのではありません。ここに一番大切なことがあります。芸術などとして表に出たものでない心の底に潜在している闇の中にかくれているものに本質があります。目に見えない世界だから何だかわからないし、証明できないからとすてておくと、そこに流れている精神世界を忘れてしまうことになります。

アミニズムの世界では山、大きい石、川、木にも精霊が宿っているといいます、宿っているのではなく山にむかうと山が語りかけてくれあるひらめきが頭の中をよぎるのです。山の神秘さ、山の躍動する目に見えない奥にあるものを感じとるから、私達はそこに精霊が宿っている、生命があるというのです。我々の生命というと単なるこの生命、肉体を支えている生命をいいます。もう一つの生命現象である陰にかくれてあるひらめきを感じ、それを子供に感じとらせなければなりません。我々の今日の生命は、生命をもっているものを食べて支えられています。だから多くの生物の力をわが力として今日生きている限りには、その自分に与えてくれた多くの生命にかわってこの地球上をよくする使命があるのです。この使命を知らない人間は生きている資格がありません。リーダーは一般の人よりもう少し生命力がたくましく、力強く皆のリーダーシップをとれる力を持っていなければなりません。原住民の中で身体に、動物の血をぬり首がりするのは自分達の種族を守る能力者がトップとして尊敬され押し上げられるからです。能力がないのに自分だけが楽をしてお金をもうけようとか、自分さえよければ、今さえよかったですという考えが多いです。努力し未来への大きな展望と希望にむかって毎日堂々として積重ねていくものに忍えぬくという力がありません。自ら努力し忍えぬき獲得したもののがなく与えられればかりいると、一たん座折するとガタガタになり自殺してしまうという事になるのです。日本人は金を出せば何でも買えるというが、お金を出して得た食物に対して感謝し手を合せ「いただきます。」「ありがとうございます。」「こ

「それで私は生きていけます。」ということを子供にさせていない母親の教育が正しいでしょうか。大切な心の教育が忘れられてしまっていると思います。

東南アジアの難民の現状もただ食物を得る為に一日中ならぶことだけが仕事になってしまっていますが、生きる活力を与えること、如何に生きるかという方向づけを与えることが必要です。イスラム教国へ豚肉の入った食物を送るような本質をまちがえた奉仕は子供をだめにしてしまいます。世話をきのお兄ちゃんお姉ちゃんが色々やってくれるんだと思われるような我々の仕事なら残念です。皆さんのが子供を動かす時、先頭にたって指図することはやすいが充分に案をねってこうやれば子供はこう動く、こうやれば子供にこういうことがわかるというシナリオを書かなければなりません。そしてそのシナリオを子供に解釈させ、やらせ、そばにいて監督するのです。こちらがひっぱっていく様なリーダーは下の下で、シナリオを演出するだけの能力をもつプロデューサーになることが必要です。地球人ども会のように子供の夢を現実と結びつけながら、夢にむかって着実に行動をとるアクティブな子供を育てなければなりません。誰かがやってくれるだろう、人が悪い、社会が悪いのではなく自分が悪いのです。

幼い子は人の親切、やさしさに素直にありがとうといえるように。小学生になれば幼い子に親切にしてやる思いやりの心。青年は奉仕の心が大切です。これはいいとわかったらすすんでやる、誰かがやるのではなく私が、一私の仲間が一やるのであります。感謝、親切、奉仕、第四が真理の追求です。何が本物なのか、本当の心のよりどころをしっかりとつことが大切です。第五は地球はじまって以来の文化を次の世代へ移すことは今生きている人の仕事です。今生きている人がなまけてしまえば戦争などで破壊されてしまいます。我々は未来にむかって過去のながい文化遺産をうけつぐ中継者です。未来の青少年をどう生かすかというのは今生きている人の務めなのです。未来への創造は今まちがっていれば未来の繁栄はありません。地球資源を大切にして後から続く人々が生きのびていくには今の人を使いすてや自分だけよければと生きていてよいのであろうか。

これから子供を指導しくには単なるレクリエーションなどの技術で子供を楽しませるのではなく、その中から子どもが何をみつけるのか、その大切な心のよりどころ精神的よりどころをしびれるような感動をもつて子供に与えるリーダーこそすばらしいリーダーです。これからの諸君の努力に期待します。世界的視野をもつ子供を育て、世界から尊敬される日本人になってほしいものです。

今日における青年と大人との関係



関西学院社会学部教授

西宮甲子園 R.C

文学博士 田 中 国 夫

今日における青年と大人の関係について、大きく 3 つのブロックにわけて話したいと思います。

最初に、人間、特に日本人がどういう行動の法則を持っているかを私なりのモデルを使いまして話してみようと思います。

日本人の行動について、外国人や又日本人がいろいろなことを述べておりますが、私のような社会心理学者の角度からみると、日本人の行動要式は、こんな式で表わされるというものを紹介したいと思います。

その式に入るまえに、2つの例をお話ししようと思います。

第1の例は戦争中、日本軍人がどれ程勇敢であったかは皆さんもご存知でしょう。人間が消耗品のような役割をし、自分の命を少しも惜しまず天皇陛下のためにと散っていった。そんな力をアメリカは非常に恐れました。ところがあれほど勇敢な死を恐れない日本の軍人が、一度捕虜となると、アメリカ軍のために全く変転し、東京空襲の水先案内をするようになります。ドイツの捕虜は絶対にしなかったと言われています。こういった現象を研究し、本に表したのが女流文化人類学者のルースベネレクトという米国人です。

第2の例は「日本人とユダヤ人」他、沢山の書物を出しているイザヤ・ベンダサンが文芸春秋昭和47年に書いている文章に大変面白い例をあげています。

約三百数十年前に、徳川家康がまだ小さな領主にすぎなかった頃、領内に反乱が度々おこり、その原因を調べたところ、一向宗という宗派の反乱であ

ることがわかった。部下を鎮圧におもむかせるとその間はおさまるが、又反乱がおきる……… そういったくり返しの中で、よく調べると鎮圧に行かせた部下自身が一向宗であった事が分った。家康は激怒し、この部下を処刑することにした。処刑の場に臨んで家康は部下に向って処刑か改宗かを問いただしたところ、部下は「改宗はいたしません」と平然と答え、処刑を望んで首をさし出した。家康は刀を振りあげたが、何を思ったのか、急に刀をおろし、「こんながんこ者は処刑をしてもしょうがない」と言った。その瞬間、この部下はふいに家康をふりむくと、全く突然に「唯今改宗いたしました」と言ったという事実がある。家康が驚き、「おまえはひねくれ者、どういうわけか」となじると、この部下は答えて「命がおしくて改宗したとあっては、侍の意地が許さない。だがこれで私が改宗しても命おしさに改宗したのではない事があきらかになつたので改宗しました。」

これが日本人だ——とベンダサンはいっています。

つまり、もともと命をはって信んじている宗教ではない。宗教とは神との契約であり、命をはって守らねばならないいたぐいのものであるにもかかわらず、それよりも先に人の目というものが優先したわけです。

日本人の宗教観、或いは政治的イデオロギーとはこんなものだ、少しもあてにならないと彼は言っています。

これは恐らく、日本人にはぎくっ！と来る言葉だと思います。日本人は有る者（特に神）との関係において、個人がきびしく生きてゆくことはないとベンダサンは述べていますが、私は心理学者的立場から日本人のこれは、もともとの素質なのか。日本人のもつパーソナリティー（性格）なのか研究し続けています。

ベンダサンは、日本人は民主主義者でも、社会主義者でも、共産主義者でも、資本主義者でもなんでもない。日本人っていうのは、要するに状況主義者であるといっています。状況によってどんなにでも変る。メリットとデメリットを細かくわけながら、やっていくことがなかなかできない。皆いっせいにダーと流れていくんです。確一的な同調行動がその事態との関係においてほいほいと変っていくんです。原理と原則が変わっても平気なんですね。

状況次第でどんなふるまいでも、平気でという氣でなく何げなしにやるというのが日本人なんです。

こういう日本人の行動要式を私共の学問では

$$B(\text{Behavia}) = Aact + NB(\text{Normative Belief})$$

という式で表します。

つまり、日本人の行動をどういうギターで表わすかといいますと、第一のギターは Aact です。

行動することに対する A つまり態度 (Attitudo) です。例えば 60 才のおばあちゃんが、ピンクのスーツを買うという行為をすることに対する本人の態度よく似合うねと思う態度です。これは個人の信念であるし、個人の位置感であるし、個人の欲望です。これが第一のギターです。

これでもってそのピンクのスーツをスーと買うというのが第 2 のギターであり、そのままズバーンと買うのが非日本人であります。日本人はこの第 2 のギターに weight がかかります。NB (Normative Belief) という批判的信念が働きます。ある種の世間の考え方の認知 (Cognition) であります。つまり誰かがその行為に対して何か批判的に思うかもしないと思う態度です。

第 2 のギター Normative Belief に従う動き、つまり Motivation to compliance (従う動き付け) が問題になります。自分の周りが自分に何を期待しているかをまず考えます。そして第 2 のギターに weight をおいて行動します。

よって日本人は NB 型といい、非日本人を Aact といいます。ルースベネディクトは日本人のこれを恥の文化といいました。

神との関係においても、心の内なるものとの関係においてもこれがてはまります。今までこの第 1 の Aact 型がいいとされ、NB 型がダメとされてきました。

しかし、オーストラリアの学者で、上智大学のグレゴリークラーク博士がこの NB 型で動く人の幸せと Aact 型で動かなければならなかった人たちの悲しい歴史を述べています。

というのも、小さな国が集まっているヨーロッパにおいては、いつ支配されるかわからないといった時代がありました。

外国人が入ってきて、肉親の娘や母親が目の前で次から次へ暴虐され、何千人、何万人が殺され、市民生活の根底から何百年にわたって残酷な扱いをされる。そういう状況の中では戦いがつねにありました。戦いには理由がります。

征服した後、いかに正しいことをしているかを、支配した人々に納得させなければなりません。ある行為に対する態度がその通りだと思えるように考え方を refine していかなければならないのです。洗脳していかなければならないのです。そこから出来上ってきたものが宗教であり、哲学であり、社会科学であり、すぐれた音楽あります。

堂々と論議を構築しあえて、両方をもが納得しあうということ——これは不幸な歴史が生んだものではないか。そういうことを必要とせずに、お互が知りあつた者どうしがお互いの目を意識しながら——要するに気心の知れあつた者同志が、お互いの人間関係を大事にしながらやっていけたということは幸せな歴史というべきではないか。

この Aact 型又は NB 型のどちらがいいとか悪いとかじゃなくて、歴史というものが別々の行動の仕方を生んだと考えるべきだというのがグレゴリー・クラークであります。

私たち心理学者は、そこまでいいませんが、ある別の学者はこの NB 型を人間関係主義社会、Aact 型を原則関係主義社会（あるいは原理主義社会）とよんでいます。

人間関係主義社会といいますのは、善と悪との判断が絶対的なものじゃなくて、人間関係において生まれてくる。つまり状況によって善と悪がかわってくるとする社会のことです。日本人はお互いにわかる手ざわりの自分の感覚の届く範囲内での行動をします。

外国人の場合は、そういうものよりは抽象で動きます。

日本人は平和とか自由とか平等とかの抽象概念は全くわかりません。わかるのは顔色だけです。それを越えた原理とか、原則では動けないのです。そういう正論よりは人のために動きます。

これを皆さんはどう思いますか。

これをいけないという人もいますが、又、この生き方が、NB 型が日本の今日のすばらしい姿の原動力であるという人もいます。

日本人の行動の法則、中でも日本人の態度というものと行動との関係——これは非常に希薄であり、人間関係との関係において行動する weight が非常に強いといわれています。

そこで、人を動かすためにはどうすればよいか。又人間関係というものがど

のようになってきているかが問題になります。

2番目の話は何かといいますと、人間関係の変化になります。その人間関係を分類すると3つに分れます。

1. 心理的構造、又は感情の構造といつてもよろしいのですが、人間と人間というものは、ある点では妥協できる面をもっているが、くだらないことで折り合わない面があります。人間と人間の協力というのは論議ではなくて、実にくだらない感情のレベルで動きます。感情が人間関係の第一であります。

2. コミュニケーションの構造

これは言葉の構造であります。言葉とは、人間と人間を強く引きつけたり、又引き離したりします。

言葉にも2つあります、1つは連絡や用事のための言葉です。仕事の言葉とか、職場的言語といわれます。

もう1つは、会話のための言葉です。

無意味な言葉といえばそうですか、この耳紙な言葉で人間と人間の心が通うのです。これは人間が人間との活力をおこす、又は人間と人間との気持がつながる人間的言語であります。単純な雑談が大切になってきます。すぐれたリーダーとは、まさに雑談の上手な人といえます。

しゃべればしゃべるほど、自分が広がっていくっていう人ですね。それには「自分と無関係な事にどれほど興味をもって加っていけるか」ということが大事になってしまいます。

有能な人とは知的好奇心が多いにある人といえます。

3. 役割の構造

人間関係において役割というのは、一番大事なことです。自分に与えられた役割をしていかないと人は成長いたしません。

近頃の青年の中には自分に与えられた役割の中に、使命感を感じない人が多いといわれます。これは *discast* の心略といわれ、もっと自分の役割があるんじゃないかと、今の自分の役割に満足できないのです。

だからリーダーは、メンバーに使命感を感じさせるように指導していかなければなりません。

ここでは人間関係の変化ということで、役割に *weight* をおきまして、皆さんに紹介したいと思います。

昔の青年は、おまえはこの役といわれると、わきみもふらずにその役に専心しました。今みたいにどの役が自分にふさわしいかわからないということはありません。

今はモラトリアム（社会的責任、義務をのばしている年令又は期間）人間の時代といわれています。たえず誰かに頼ろうとしています。

昔の青年とは古いモラトリアムの古典的な執行猶予のあった青年といいます。昔の青年には役割があったんですね。そして彼らがどのように考えていたかと申しますと、

1. 私は半人前である。半人前であるから早く一人前になろうとする役割がありました。
2. 自分とは何かを探究していた。
3. 半人前であるが故に、自由に大人の世界を批判し、批判する能力を一生懸命みがいていた。局外者の意識を持っていながら、自由な批判精神のもとに歴史的な展望すらもとうと努力していた。
4. 一人前になる前の心理的・物理的・生理的な禁欲があった。つまり欲求不満の状態が強かった。

これが昔の青年であります。

今の新しい執行猶予のあるモラトリアム人間はどうかといいますと、

1. 半人前意識から All mighty 主義感へ

新しいものの方が新しい技術をもっているし、その事の方が大切だと考えている。

2. 禁欲からの解放

お金を出せば、ある程度は解決できるし、万事に enjoy できるようになった。

3. 修業感覚から遊びの感覚へ

大切なことは、継承者から局外者へとしらけの時代だということです。

大人の文化を受けついでいかなければならないのにもかかわらず、無関心のふりをし、マスコミの子分が今の青年であります。何でもかんでも批判するんですね。自分たちが努力して、ある役割を受けついでいかなければならないのに、現実の世界でやろうとする人はおりません。結局一人一人が、仕事に打ちこむということ、これが大事なんですね。

今の社会では、ある一つの仕事に打ちこむということができなくなっています。専門職の人以外は、ある部分部分をうろうろして、一つのことについて専念できない状態です。

そこで大事なことは、仕事の満足感というよりも、仕事の意義の満足感を感じてもらうように、その現物のリーダーが本人に納得させることです。仕事の意義の自覚、これが大切です。

最後に3つめ、しめくくりです。

ここでまとめになりますが、望ましいリーダーシップということについて話したいと思います。人間がある行動に踏みこむ時の原動力とは、大きくわけて2つあります。

1つは、この人のためなら——という気持です。本論よりも、この人のためにという人柄の魅力です。

リーダーはつねにこの人のためにどうしてあげるかということを考え、幅広く受け入れる技術が必要であるし、メンバーたちの人柄以上に魅力をもつ Self control も必要となってきます。

2番目には、Human ware 対人技術というものです。これは理性的な結論を感情的にうまく納得させる対人技術です。それには話術・人間性又は活力が必要になってくるかもわかりません。

それらの相乗作用でできてくるかもしれません。どうしたらよいかということは私もよくわかりません。それは皆さんで整理していかれることが大事です。しかしながら、今日の大人と青年との関係ということで3つの話をしました。その中からリーダーとして青年の理解、日本人の行動の理解、その欠点をどうしたらいいか考えてもらうとともに、最後に申しましたテクニックをリーダーとしてつかんでいくことができるか、考えていってほしいと思います。

グループを指導するため



神戸 YMCA 総主事

関西学院大学社会部講師

ガバナー・ミニー 今井 鎮雄

グループを指導する為にという題のもとにお話しをするのですが、グループを指導すること自身はそんなにむづかしい事ではありません。それよりも1人の人間をグループの中に入れて、グループの中でのプログラムや経験をさせ、それを通して成長していき、新しい社会の中で役にたつ人間を育てて行く過程を、リーダー達が意図的にグループを運営していくプロセスが大事なのであります。社会の中にあって、1人1人の子どもをどんな人間に育てるのか、その為にはどんな経験を与えればよいのか、又経験を与える以前にはどんな人間だったのか——そういう事が大事なことになってきます。リーダーは来るべき新しい社会を想定し、新しい社会に役立つ人を育てる事を考えてほしいとロータリーは希望し私自身の願いでもあります。そしてこの事が、秦泉寺先生、田中先生に巾広い視野（立場）からお話しを頂いた理由でもあるのです。しかし新しい社会を想定するという為には、現在の子ども或いは青年がどんな状況におかれているかを充分考えてほしいと思います。私はお二人の先生の講義を復習しながらグループの問題に入ってゆきたいと思います。

1980年代は大変な時代だとはよく言われていますが、おそらく我々は日本という国のみでは生活出来なくなっている事を実感として分るでしょう。私はこれを国際化社会と言っています。国際化の化は、いつの間にか国際化された社会に導入されている事であります。この国際化された社会の中で生きるとき、NIEO（新経済秩序）は見逃すことは出来ないと思います。今迄はガット体制

というものがあり、アメリカを中心とした経済体制が世界中で或る種のパターンをしめ、アメリカの世界的責任ということですすめられていました。すなわち先進工業国が世界の責任を持っている社会でありました。最近になってニューインタナショナル・エコノミックオーダーという事が言われて来たのは、第3の世界が同じように自分達の経済的な生きる権利を主張するようになったとき、今迄のように特定の国のみが利益を増していくのではいけない。むしろこれから育ってくる国々も同様に経済的シェアを受けなければならぬという宣言をし、世界もこれに同調しなければならない動きになって来ました。

1973年アルジェリアで、非同盟諸国首脳者会議が開かれ、二つの宣言がなされ、政治宣言では「世界の平和は超大国の取り引きの中で世界の平和があるのではなく、一つ一つの本当に平和を願った国々が勝ちとったものこそ、本当の世界の平和である」と宣言しました。これはやがて1975年ベトナムに現れました。又経済宣言では「自分の国から出る資源は自国のものであり、その価いは自分でつける」と宣言され、この事から世界の経済秩序が変った事は周知の事であります。1974年には日本も最初の石油ショックを受けたこともご存知の通りです。このように1973年以後歴史の流れの中でこういった激しい流れが出て、我々の歴史は変りつつあり1980年代に入ろうとしています。一方、One world problemと言って、食料・人口・公害汚染・平和等の問題は今迄のように自国のみの問題ではなく、世界の問題である。このone worldの問題をお互いに解決しようという声が片方には第3世界から上ってきました。従ってかつては力で抑える事の出来た国際連合の舞台の中では大変大きな問題であったわけです。こういった世界の動きの中で、国際化社会を動かしてゆくには、

1. 国と国
2. 世界企業 に加えて
3. 民衆が大きな役割りをはたすことになってきました。

民衆NGO(Non Government Organization)には例えば赤十字・世界宗教連盟・Y M C A・ロータリー等もその一つであります。こういった国際化社会になって来た時、諸君にお願いしたい事は、今迄、若い人達が田中先生のお話しにあった第2のギター(NB Normative Belief 従う行動)で動いていたけれども、これからは第1のギター(Aact 本人の態度・考え)を大切に考え、国際的視野で物を考え、価値判断してゆかなければやってゆけない社会になってきた現状をよく考えて

ほしいということです。貴方がたの扱う青少年のパーソナリティを考える時、何が大切な問題であるかをよく考え、今迄の伝統的な共同体社会の中にいるものから、自分の意識を確立して生きてゆく事が出来るように、自分達の意識の中にこの問題を解決する意識と見通しを持って、グループの扱いをしているかどうかが当然我々に問い合わせられて来ます。

来るべき社会における二番目の問題は、高齢化社会であります。

国名	年代	%	所用年数
フランス	1790	5 %	170年
	1960	12 %	
スウェーデン	1855	5 %	105年
	1960	12 %	
日本	1950	5 %	45年
	1995	12 %	

(65才以上の人全人口の中での割合)

上表のように、他の国に比べ、急速に老人が増えるという日本の現状を見る時、福祉というものを根本的に考え直さねばならない段階に来ています。戦後(1946年)哀れみの福祉より、国が(行政)責任を持つ福祉はまず最初のステップをふみました。ところが、急激な高齢化社会の到来で福祉予算がついでゆかなくなつたのが現状であり、近い将来、社会の人々がお互いに助けあわねばならない社会が来る事は当然予想されますし、これが1980年代の新しい課題であります。

1980年代に間違いなく来るであろうもう一つは余暇社会であります。ラボールというフランスの学者が次のように述べています。

「今後人間が受けるかもしれない危機は三つある。」

1. 核戦争による危機
2. 飢餓による危機
3. 余暇による危機

この三つの危機のうち、1, 2は人間の叡知と知識で切り抜けられるかもしれない。しかし余暇は救いようのない危機であると彼は言っています。我々は働

くという事を中心に生活をしているのであって、働く事がなくなれば、生きる事の意味がなくなるのではないでしょか。リーダーとしての君達は、余暇というものを考えると、野外活動の重要性が見直されなければならないでしょ。

1980年代に入り、経済・行政が大きく変ってゆく時、次代を荷うリーダー諸君は、前述のような視野にたって、子どもの価値体系、価値感が今後は非常に大事になるのだという事を合わせて覚えておいて欲しいと思います。文化人類学者である M. Meed は、「青年というものは文化の諸産である。」と述べています。Personalityを考える時、自分の性格の中で社会的要素で変わることの出来る部分を Personality と言いますが、S.R.SLAVSAN は「Personality とは、我々が生れてから経験したものの総和である。」という言い方をしています。Personality と文化は連っており、文化が Personality に影響し、他の文化を持った社会に入った時、Personality がとまどいを起し、こわれる原因にもなりましょう。現在の日本の青少年は社会の変化が激しすぎてどこに規準を置き、どうして適用していくかとまどいを起しています。戦後の少年非行は3回のピークをむかえています。

1951年 生活型非行（古典的非行）

1967年 遊び型非行（いたづら）

1979年 自己破滅型非行（自閉的）

こういった時、どうすればよいかを考えると、グループの経験を与え、意図的に新らしい Personality に移行してやるのが望ましいことだと思います。グループの経験は少くとも、その人自身が大きくなり、転用出来るものである事を考えると、グループの指導者はそのことを意図的に行なうことは大事な方法論になります。意図的という事は、どういうものに作り上げるかを充分分っていないとだめなのです。こうして考えて来た時、グループの大しさというものが分つて來たと思います。人間が誰れでも経験するであろうグループ（役割）を SLAVSAN は次のようにあげています。

1. Family group（家族集団）

愛されている事を知る経験が大切である。良心と自我理想を作る。

2. Play group（遊び集団）

社会性の出来る経験

3. School group

4. Occupation group
5. Hobby group
6. Homo group (单性集団)
7. Hetero Sexcial (両性集団)

Personality がグループの経験によって変えることが出来るのなら、青少年活動をする時に、新らしい社会に適応出来る人間を育てる為に、上記のグループを活用することもよいだろう。1980年代はまさに世界的視野に变ろうとしているのに、我々の社会は今だに、エリート社会を夢み、高学歴社会ではなく、学校歴社会のひずみの中で子ども達は育っています。学ぶという事はどういう事かを真けんに考える必要がありましょう。学ぶことの意味を充分に問われずに学ぶことは意味がなくなっているのです。ある大学教授の話された事に私は胸を打たれました。筋ジストロフィに犯された青年に「私には確実に2年後に死が訪れます。だから学ばなくてはならないのです。何を勉強したらよいのでしょうか」と問われた時、学問をするとはどういう事か、教育とはどういう事かが見失われている今、確実な答えが出来なかった事が残念だと——。

エリクソンという学者は、愛も知識も、食べ物も住むこともいつでも他者とのかかわりあいのなかで満たされる。（人間というものは他者からの愛を受けるに、いつも愛に答える能力を持っている。）と言っています。愛という事は人間・人と人との誠実の根拠であります。愛を受けることと同時に、それに答えようとする人間を作ること、これは健康なグループ経験から生れます。言い換えれば、健康な Personality は健康なグループ体験から作られます。リーダーとして、常に相手の言葉の後ろにある事を聞きとること、その人の側にたって考えるというリーダーの大切な役割りを忘れないでいて欲しいと思います。

講 演 Ⅱ

経験を通して



山村硝子株式会社勤務

Parent Effectiveness Training In tructor

八 尾 芳 樹

皆様と同じように、今も青少年活動を行っている者が、理論化・觀念化された話しではなく、私自身これまで青少年活動そのものについて、どの様な基本的な考え方でとり組み、どのように悩み、どのような問題を感じているかをここで分ちあいたいと思います。魂が非常にハンガリーな男が嘆いているという風に聞いて頂きたいと思います。

私は昭和22年、ベビーブームの最先端に生まれ、正に競争社会のとっぱしを走って来たわけです。親爺に「お前ボイスカウト入っていたから大学通ったんや」と言われた言葉が、最近になってやっと自分なりに解明出来て来たような気がしますが、それほど中・高時代を通してボイスカウトに熱中し、キャンプにあけくれていました。ついで大学一年の時、西宮の教育委員会主催のカッター教室にはじまり、中1～中3の子供達が自主的に活動出来る西宮海洋少年クラブをつくり、それが発展して日本で初のシースカウトとなり、高校生・大学生を移管しました。

我々日本人は、海に囲まれ乍ら、海洋民族ではなく、農耕民族だから、海で活動するに当っては海洋民族の発想にあった訓練、プログラムが必要とカッターに寝泊まりの道具、炊事道具等を積みこんで、自ら航海計画をたて、最初は西宮から10km程の淀川の上流にはじまり、大阪湾一周、淡路島、四国、鳴門、広島までも自ら計画をたてて出てゆきました。そういう中で彼等の真摯な姿をみていると、今の若者が何が三無主義だ、僕らよりもスバラシイ精神力を持っているし、体力も優れている。彼らのエネルギーの発散する場所や機会があれば、スバラシイ事が出来るのではないかと勉強させられました。こういったボランティア活動を通して考えたことは、今の子ども達のなかで、学校の勉強の中でやったら出来るのだと思える子はそれでよいとして、人格形成の時期に“やったらできるのだ”という世の中の価値基準でみた成功・不成功ではなく、人生の中で、学校の勉強が全てではない。いろんな意味での心理的成功感を感じさせる事が非常に大事なことではないかということです。私自身も自分の持

つ技術を世の中との絡みで提供出来ないかと考え、朝日新聞とタイアップして朝日海洋少年教室や、朝日カルチャーセンターとタイアップしての琵琶湖でのヨットスクールを行っては、子ども達にそういった気持を感じてもらえるように努力してきました。ヨットスクールを通して感じたのは、フィールドベースでの活動だけではもの足りない、海だけのものではつまらない、もっと自分の枠を広げて、夢をかなえたいということであり、阪神間に住む社会人・学生のボランティアリーダー50名程が集って、今度は陸・海・空を備えたクラブを作ろうということでアウト・ドア・エジュケーション・センター（O·D·E·C オディック）を朝日カルチャーセンターの一つとして作りました。内容は信州や琵琶湖の冒険学校、カナダでの冒険学校、そしてこの年末には地球最後の楽園と言われるロタ島で日本の子ども達がどれだけ生活出来るか、ロタ冒険学校を企画しています。

長時間のトレーニングをしていて感じたことは、我々は子どもを預るリーダーであるが故に研修をする。それは何の為かというと、当然自分の事のためではあるけれども、子どもを預るに当って、責任をもって子どもを育てる為にいかに扱うかを真剣に考えるから、貴重な時間をさいて勉強していられるのだということです。そして一方、我々リーダーがいくら一週間或いは二泊三日のキャンプで良いものを体験させても、家庭に帰ると元の木阿弥になってしまうことが多いということです。人生の大半が親と子の関係で育っているので、少々のキャンプをしても、家庭での人格形成の影響があまりにも大きいのです。それなのに何故、日本には親の為のプログラムがないのかと考えていた時、たまたま3年前、西宮の図書館で「P·E·T」（ペットー親業ー）という本を見つけ「これだ！」と思ったのです。今までリーダー養成の為のトレーニング、自らを高める為のトレーニングと個々レベルのトレーニングが多かったのですが、そうではなく、実際に子どもを育て手助けする為の技術は何かを模索していたので、ピタッと来たわけです。

行動科学、臨床心理に基づいた親の為の効果的技術（Parent effective training）についてサンフランシスコで講習をうけ、資格をとり、9月から近くの公民館でやったら、世の中で大きな騒ぎとなり、“親業”と社会面では一つの流行語となってしまいました。私の意図するところは、極端に言えばリーダーは自分の子どもを持っていない。持っていないが為に、よりその親に近い状態

で子どもに効果的なトレーニングをいかに勉強するかの必然性が出てきたのと、もう一方では、今の親は子育てに対して問題を持っていることの二つでした。親の持つ問題とは、数年前は何があっても社会が悪いで片づけられたものが、最近では子どもの問題に関して、すべて親が悪いという型でマスコミにとり上げられる。親の立場としては、どうして子どもを育てれば良いかの指針を持った親の為のプログラムの用意は皆無に等しい。そういうニーズから大きな展開をしたわけです。食事・着るもの・住むところを与え、勉強や躰のめんどうを見る、これだけでは親でなくても出来ることです。他の大人にとって代れないものとは何か？ リーダーにしても、他のリーダーにとって代れないものがあるのではないか？ これが親業の原理です。親と子の本来の愛情に満ちた人間関係、それは他人にとって代れないものです。どんな親になれとか、どんな子に育てねばならないという画一的なものではなく、各親の持つ価値感を基にして共通の技術を身につけ学ぶ。それと一番の目的は、大切なことは親子の心の触れ合いを感じる親子関係にしようということです。目下、日本には3人しかインストラクターはいませんが、今米国からトレーナーを招いて、親業のインストラクターを養成中です。

今まで話して来たこと——自分が何を感じ、何をし続けて来たか——といった中から、現在自分が悩んだり、感じていることを四つ、五つにまとめてお話しを終りたいと思います。

1. ボランティアリーダーだからと言って、余暇の有効利用等という消極的なものではなく、同じリーダーであっても専門家になってはいけないことはない。むしろスペシャリストになった方が良いのではないかと絶えず感じていたこと。自ら成長しないリーダーは駄目ではないかとたえず自分自身に言い続けてきました。
2. 昨日あるリーダーから「最上級生となった我々が、先輩から受けたやり方を後輩にやっているのに一向について来てくれない。これはどういう事なのか」という悩みを聞きました。昔は親子・上司と部下・先生と生徒等の間に主従関係というものが明確にされていました。なおかつその役割や関係が社会の外から社会的な統制力として、家庭内でもグループにもあったけれども、最近その社会的統制力そのものがうすれるが為に、様々な関係や役割もうすれて来たのではないでしょうか。

3. このライラもそうでしょうが、キャンプのプログラムで何が楽しみかと、はじめにアンケートをとると、「春に泳げる」「カッターにのれる」等プログラム系統のものが多いのです。ところが帰ってからの作文には「友達が出来た」と殆んどが書く。学校にも、家の周りにも友達はいるのに、何故改めて作文に友達が出来たことを書くのかという問題なのです。親業をしていても感じることは、親にとっても本根で語りあえる、心の触れあいの場がないということです。ここで大切なのは親も子も本当の心の触れ合いを自分で分らぬままに求めているのではないかということです。
 4. かっての日本の持っていた文化や価値はくずれ去ろうとしている。しかもそのスピードはどんどん早くなり、それを塞ぎ止めることも補うものもなくなりつつあるということです。もし外国からのアイディアでこれを補い防ぐことが出来るのなら、一時的にはそれもよいでしょう。しかし根本としては、今迄の日本人の価値の伝承とか、持っていた文化を我々が見直さなければいけないのではないでしょうか。もう一度日本の古くからあるオリジナリティを見出してゆくことが我々の世代の今後に課せられている問題ではないかという気がします。
 5. 最後に 1980 年代は前半は女の時代で、男は駄目だと思います。
- しかし、80年後半には又男の時代になると思います。何故なら、今の世の中がまさに求めている潜在的ニーズに応えられるのは、既成の枠組の中で生きている人間の、枠組みの中だけの発想では、人間の本質的な思考、ニーズに対して応え得ないと思うからです。もっとトータルに生き、中間領域を生きている人が応えられると思います。現在の社会では、職場に、家庭に、唯そこで求められているバラバラの役割りを一生懸命こなしている男性にはトータル的な発想は出来得ないと思います。80年代前半は、トータルな人間として生きていく為の大手術が必要な時だと思います。
- これにくらべて現在の女性はトータルに生きているから、80年代前半はよりよく生きることが出来るでしょう。ところが翔んでる女性に、「今欲しいものは?」とたづねると、「お嫁さん」という人が多いということです。外で素晴らしい仕事をしていても、家庭に帰れば主婦・母親の仕事が待っていて、自分の体を休める間もなく追われてしまう。そこには自分をこやす時間もないのです。その点、男は幸か不幸か、今の社会では帰宅すればひっくり返っ

て明日の生産の為の休息や、エネルギーを蓄える間がある。こういった意味で考えるなら、今、バラバラにされた男性が手術を終えて、トータル的に生き出せば、最終的には80年代後半には男性の時代が来るのではないかと思います。

主導権の問題や、女の時代・男の時代にかかわらず、来るべき社会のために、男性はトータルに生きることを、女性は明日の為の休息や、自分自身のための蓄積を考えてゆくべきではないでしょうか。



兵庫県青少年局
青年の島運営委員

鍬 方 志 郎

キャンプは從来、夏にするものだという観念が強かったのですが、この余島で4年間、春のキャンプ（ロータリー少年少女キャンプ）をやってまいりました。春には春の自然の動きがあります。特に海藻類は今が一番変化の多い時期です。それを生かしたプログラムを工夫してやってまいりました。

もともと私はキャンプが好きでした。29才の時、はじめてヨットのメンバーを連れてこの余島にやってきました。その時私の、いや我々グループの態度について今井先生からきびしいお叱りを受けました。その事が私をキャンプから離れられない人間にし、今迄非常に長い今井先生とのおつきあいのうちでいろんな事を教わった始めたと思ったと思います。

キャンプだけでなく、子ども会の活動であれ、なんであれ、完全なメンバーでなければリーダーにはなれない。全体で行動する時、その規則が守られなければ、しかも何もかも理解出来る大人になってそういう事が出来ないようなら、リーダーにはなり得ない。それほどリーダーとは大切なものである事を考えてほしいと思います。勿論それによって金銭的利息を生むわけではなく、自分の貴重な時間・労力・あらゆるものをしてリーダーとしてやっていられるはずです。しかし子ども達を全面的に預るとき、子ども達の生命を預っているのだと常に考えないなら、キャンプ等は止めた方がよいと言っても言い過ぎではないでしょう。そして我々が本当に真剣にとり組まなければ、子ども達はついて来ない。その為には悩むこともあるでしょうし、本当に大変な事だと思います。我々は皆さん方にそんな大変な事を引き受けて、子ども達の為に、いろんな人達の為に奉仕して下さるあなた方に感謝したい気持で一杯です。

今日は私は自分の経験から海とキャンプを通してお話しをしてみようと思います。

キャンプにとって最大限必要なものは自然とのかかわりです。一般にいうキャンプには、ともすれば折角キャンプに行きながら自然を取り入れずに終っているものが多いようです。キャンプ生活やプログラムに追われ、折角日常生活

では経験出来ない環境の中に入りこんだにもかかわらず、その環境が我々のやっているプログラムに生かされているか、もっともっと自然の環境というものが我々のプログラムに入らねばならないという事を常々痛感しています。たんばや農家、植林された森林をみて自然という言葉を使うことが多いようですが、はたしてそれが本当の自然の姿といえるかどうかを考える時、自然という言葉のあいまいさを感じます。本当の自然とは人が手を加えない、ありのままの姿だと思いますが、悲しいかな我々はそういった所に出掛けていく事は出来ない。我々が活動する分野の線を引かなくてはなりません。勿論、キャンペーの構成（経験・年令等）によって自然とのかかわりあいもおのずから違って来るはずです。

9年前、兵庫県では若者達になんとか夢を与えたと青年の島を作りました。松島という瀬戸内海にある無人島で、周囲3K、面積10万坪を持つかなり大きい島です。この島をどう利用するかを考えた時、ずいぶんいろんな意見が出ました。総てのことを青年達の手で作り、彼等で運営するという知事の発想のもとになんとかこの島の自然を破壊することなく、我々が安全に生活出来るようにと考えました。まず最初に水をどうするかの問題からとり組みました。松島には採石の仕事が行われていた跡があり、3軒の人家の跡がありました。この人家の古い古い、もううまってしまった井戸が見つかりました。しかし既にメタンガスがわいており、使うことは出来ません。だんだんさがしているうちに、深い谷あいのなかでチョロチョロと水の音が聞こえました。この水の源をたどり、地面の岩盤まで堀り下げ、そこで水を貯めるようにし、なんとか水の問題は解決しました。

次には排泄の問題です。人間が生きていくうえに、どうしても避けられないこの事の為に、真剣に考えました。穴を堀るという原始的な方法の発想から始めて到達したのは、自然に腐敗させたものを順に酸素の中を通して空気ふれ、最終的には蒸発さす方法をとりました。その為に必要な水は炊事用に使った水を貯め、手動式水洗便所のようなものを考えあげました。自然の中で我々が生活しようとした時に、排泄物のみでなく、残飯の処理等あの始末を考えなくてはならないと思います。水と排泄には一応施設らしきものを作らねばならないけれども、そのあとは、人間の住むのは平らな所を求め、テントをはって住めばよいではないかと我々は考えました。しかし台風等が来た時の逃

げ場所は作っておかなければ、人の命を預る責任をとわれる事であり、当時流行していた強化プラスチック製のカプセルハウスを避難場所に用意しました。こんなふうに最も単純な姿であることが、自然の中でキャンプをする姿であったのかどうか分りません。もう一つの姿は余島とも言えるでしょう。この島も独立した無人島です。お話を聞かれたと思いますが、約30年位前に、今井先生がさがし出され、今私がお話したようなひっそりとしたキャンプから始められたのです。しかしある事情の為に、この島をなんとか持ちこたえる為に、皆さんがお泊りのような立派な施設が出来ました。しかしこれまでつちかって来た長い歴史のある子ども達のキャンプは、そのままの姿で残したいということから、島の南北部に以前と同じように素朴な型で残っています。

非常にスバラシイこの環境を精一杯残すように努力し、その中で人間が快適に過ごせる場所を作り、自然と人間との間をうまく調和させているこういった例は全国でも珍らしいでしょう。この精一杯残された自然を我々がいかに上手く利用し、自然と対話してゆくかをもっともっと考えないと自然の中でのキャンプというものが生かされて来ないのでないかと思います。ロータリー少年少女キャンプはこの事を考え、あらたにキャンプというものを考え方直そうと、今井先生が提唱されたことによって始められました。自然学習という言葉は単元のなかでよく言われますが、自然を学ぶという事は、自然の中に我々がつづまれたとき「あゝ、自分はいま自然の中にいるのだナー」と感じられるようなプログラムを持ってゆくべきであり、もう一つは折角自然の中にいるのだから町の中で出来るようなプログラムは出来るだけやめてしまおうという考え方でなされています。

例えば歌の時間というプログラム設定はいっさいありません。しかし旗上げの時、食事を待つ時、キャンプファイアーの時いつもどこかに歌が生かされています。皆さん方の今朝のプログラムの採集は、フリータイムを変更して頂きました。その時自然に我々があわすのだと申しました。晴天であれば晴天のプログラムを考えればよいのです。ロータリーキャンプでは基本的な生活の時間をのぞいて、あとはその日の気象条件によってリーダー達がプログラムを考えてゆくといった方法がとられています。

採集の出来た日はそれで食事を作ります。キャンプの食事はカレーライスという発想から脱尾し、自然の中にあるものを少し手を加えて食べるという自然と

のダイナミックの結びつきが生まれました。最初は神戸市の教育植物園の林中元先生、星の福井先生と3人でプログラムを組んでいましたが、だんだんリーダー達が勉強してくれ、我々は助言者にすぎなくなるまでに成長してくれました。勿論これが総てだとは思いません。

今、育っていってくれる若いリーダー達がもっとスバラシイものを考え出してくれるでしょう。そして今のキャンパー達が成長してリーダーとなってくれたとき、今のこの経験をもとに、もっと深く考え、更に進歩したものを考えてくれるでしょう。

私自身、このキャンプにかかわる時、今井先生という立派な先生を得たことが大きな幸せであったように、私が持っているものを、ここで奉仕してくれているリーダー達に少しでも多く伝えたいと願っています。

我々が持つキャンプを、人と人とのつながりのなかで、どんどん発展させ、更に奥深いものにしながら次の世代へと伝えてゆくものではないかと思います。こうして育った子ども達が21世紀を荷背うのだという事を考えますと、我々の役割は大変なのだという事を改めて考えさせられます。

食堂の前にある「人と出あい、神と交わり、愛の火のもえるところ」と書かれたこの言葉をもう一度かみしめ、夫々のグループに帰ってほしいと思います。

バズセッションより

疑問点とその解答 話し合いのポイント



I. ロータリーについて

- A. ロータリーとは、メンバー構成からみても、お金と暇のある人の集まりではないか（例会時間の疑問）、又ロータリアンが一つの肩書となっているのではないか。
- B. ロータリーの奉仕の本質とは。
青少年の育成とロータリーとがどうしてつながっているか、ローターアクトとのつながりと、ローターアクトの原点に関する質問。

解答

A. (梶浦パストガバナー)

ロータリーは友情の集まりであり、わけへだてがないことが本質である。実業人・専門職業人等業種の違う人との交流により、自分の知らない世界を広げることも意義があり、それによって夫々の人格を形成し、寛容する。

私の心に残る詩を紹介しよう。

Money is but a measure of valve
Selfishness is the unenlightened
 self destruction
Service to other is the enlightened
 self interest
He profits most who serves best
He profits most who serves best
Service above self

(執行パストガバナー)

友情から始まったロータリーは、語りあえる友達が出来ることが目的の一つであるが、日本のロータリークラブは、ステータスシンボルとしての要素を持っている事は問題である。

B. ロータリーの3大奉仕

社会奉仕——社会の問題に対してみんなと考える。

国際奉仕——国際的に他の国と交流し、助けあう。

青少年奉仕——今の地域社会の問題は、よい青少年を作ることである。

この島で行われているロータリーキャンプや、ライラセミナーはこの分野である。

ロータリーキャンプは春休み中に、新学期を前にして、勉強とは何の為にするかを子ども達に考えさせ、興味を持たせて、4月から新学期を迎える事に主眼を置いている。キャンプはプログラムの一つであるが、楽しいプログラムの中に教育的意義がある。

ライラセミナー・夫々の団体自身の方法で行うトレーニングは各団体にまかせ、ここでは世界的な視野を持つリーダーを育てる為にセミナーを行う。折々には、直接的な問題も又触れていく。

ロータリーと世界との関係

1. 各地区で青少年交換を実施
2. ロータリー財団奨学生を毎年世界各国におくる（親善大使の役割も兼ねている）。
3. ローターアクトは、ロータリーのカブクラブではなく、対等のクラブである。ロータリークラブが会員相互が完全に平等であり、お互いを育てあうように、ローターアクトも同じであり、上下関係等は全くない。

Ⅱ. リーダーシップその他に関して。

A.

1. 新しい会員をいかにひきつけるか、魅力あるグループを作ろう。
又、子どもに対して、はたして意義があるかどうか考えてみよう。
2. 青少年団体と役所（行政）とのかかわりの問題
3. 運営財源の問題
4. キャンプ場減少の問題

B. 自主性——子ども達にいかに自主性を養うか。

1. 実行委員会・プログラム運営によって養う。
2. 完全に子ども達にまかせ、リーダーが情況をみて判断する。
3. 常に子ども達に課題を与える。それを通して小学生より中学、或い

は高校とだんだん芽生える。

4. テレビによる影響は大きいので、テレビを通じるのもよいのではないか。
5. 意見を言う人と、だまっている人との差が多く、話さない人の意見を引き出すにはどうすればよいか。或いは、自分の意見を持っていても、否定されるのではないかという不安がある場合もある。
6. 人によっては聞き手を希望する人もいるのではないはどうか。

C. 子どもの安全性について（津の子ども会の問題から発展して）。

今井ガバナーノミニー

ボランティアとしての仕事の責任を問われねばならない。その為にも、リーダーのもっとレベルの高い育成が必要である。根底には、保険の問題、行政との問題等多くのことがある。

深川ディーン

学校関係の事故の問題は非常に多い。

法律的にみても、ボランティア又は職業人にかかわらず同じように責任がかかる。

III ボランティア或いはリーダーとしての心構えについて。

1. 技術的なものや、自己満足に終るのではないか。

活動を通して、自己研鑽の場としてとらえ、子どもも共に育てるという共通理解を考えたい。

2. 身体障害者にボランティアが必要か。

日本では哀れみが愛より先に立っている。しかし単なる同情ではなく、手をたづさせてグループ活動を援助することは必要である。

3. ボランティア自身が、有難うの気持を持つ事が必要ではないだろうか。

IV ボランティアとしての悩みについて。

1. 時間的制約の悩み

社会に出てから時間を作ることは特にむずかしい問題である。

2. 仲間（リーダー間）のなかのむずかしさ

先輩・後輩の立場

参加者感想文

A・D グループ



カウンセラー

三 原 寿

私は、ロータリーに入って7年程であるが、私にとってロータリーらしい活動に出会ったのは、ライラに参加したことであると思う。地域社会に役立とうとしている若者達に、ロータリーがライラという研修の場を与え、ロータリアンと共に考え、共に話し会えることは大変素晴らしいことだと思う。ここには、心で奉仕するロータリの精神が生きていると思うからである。

3泊4日のキャンプを思い出して見ると、午前中行われた講演が素晴しかったと思う。3人の先生方の情熱に溢れたお話を聴いていると、2時間はあっと過ぎたように思う。

又3日目のバズセッションでは、若者たちが、如何に不自由な環境で社会に役立とうとしているか熱心に討論され、私にもなにかしてあげれることはないか、真剣に考えさせられた。これらの話は夜のキャビンタイムにも語りつながれ、若者達とじかにふれあえたことは、私にとってとてもよい経験になったと思っている。

こんな素晴らしいゼミナールが行えるのは268地区の今井先生、深川先生達のご尽力によるところが大きい。深く感謝しています。

これからはもっともっと多くのロータリアンの方々がライラに参加して、ライラを知って欲しいと思う。そうすればこのゼミナールはもっともっと素晴らしいものに発展していく信じている。

カウンセラー

林 真 紀

春の余島で四国と兵庫の若者が出会い、四日間をすごしました。性別・年令・仕事をこえ、みんな心からうちとけ仲良くなつたこと、なんだか夢のように思いました。

余島の自然、整った設備、お世話下さったロータリアンの皆様の御尽力、先生方の身のひきしまるお話に加えて、一人一人が素直な自分を出せたからではないかと思います。ライラには人の心を素直にさせる何かがあるようです。若

い人はすばらしいし、若い心をもった人はもっとすばらしいと思いました。知らぬ間に私も仲間に入れていただき幸せ一杯でした。三原先生、メンバーの皆様、本当に有難うございました。ライラの感動を胸に生活できる日々を感謝しています。皆様のご活躍心より祈って居ります。

荻 本 文 人

まず、はじめに感動した事は、この余島の自然というものでした。そしてここでたくさんの友達ができ、悩みを夜おそくまで語りあったことは、大へんすばらしいことだと思います。

また先生方の講演は迫力があり、ひきつけられ、睡眠不足でもまったく眠たくなりませんでした。大へん勉強になりました。

リーダーとしての自覚がはっきりしてきた他に、やはり人間として、日本人として生まれてきた使命を強く感じました。

ここで学んだことを地域に帰っていかしていきたいと思います。

伊 藤 基 和

セミナーに関して

- 各先生の講義には、それぞれ当然のことながら主張するものがあった。それを自分自身に同化し、消化してゆくには時間がかかるし、その主張が正しいともまちがっているとも今の段階ではわからない。しかし、いろいろな意見を聞くことができてよかったです。
- 世の中の広さを感じた。いろんな人のいろんな経験・意見をきけて楽しかった。

ロータリーに関して

- ロータリーをとことんまで知ろうとは思わない。知るのは無理かもしれない。でも多くの人に一つ共通点（信頼といわれた）があるのはすばらしいことではないか。

- ・ロータリーはゆとりがある。物質的・精神的に。おおらかといえるが一方で団体として何か雲をつかむような存在でわかりにくい。

自分自身に関して

- ・自分に厳しくしなければと思っていたが、講義やみんなの意見をきいてますますその印象がつよくなつた。リーダーとしての“心構え”まではいかないかもしれないが、ある方向づけをしてくれたような気がする。

今後とも何ごとも一生懸命しようと思う。

切 明 繁 行

私は、今回のライラセミナーに参加して、いろんな人と話し合えたということは、自分自身にとって得るものがあったと思うし、講師の方々のお話も、これから自分が生きて行くうえで、何かかんじとれるものがでてくると思いながら離島するわけですが、もっと話し合う時間がほしかったし、これからもこんなきかいがあったらぜひ参加して、もっといろんな人たちとの交流をはかりたいと思った。

小 山 正

今、第2回 RYLA の全日程が終了しようとしていますが、この4日間、種々の団体の指導者の方々と話ができ、本当によかったです。

RYLA というのは、参加者各々が終了後、各自の場で活動していく中で、その意味がわかってくるのではないかでしょうか。期間中、色々とお世話になったロータリアンの皆さんに心から御礼を申し上げます。

高井久己

今回このライラセミナーに参加して、4日間を通じて一番印象に残ったのは、午前中の3名の諸先生方の講演であった。僕は今、加古川の野外活動サークルにはいっているのだけれど、子供たちを指導する上で大変参考になった。また、海辺でキャンプをしたことがなかったため、海の貝や海草などで思いもよらぬものが食べれたりして、すごい発見をした気がした。また、同じグループの中の人で、同じような野外活動リーダーをやっている人たちとおたがいの活動状況や問題点などを話しあい、それを今後の活動の糧としてやっていこうと思っている。わずか4日の間であったが、素晴らしい友と出会い、親しくなり、そして今後もこの友たちとつながっていく。一人一人の力は小さいけれど、みんなの力をあわせれば、ライラの精神をみんなにしんとうさせることができると思う。僕はここで経験をまわりの人々におしえてあげようと思っている。

最後に一言、「ライラよ永遠であれ！」

矢川克仁

1. 神戸から小豆島までの3時間の船の中で、ロータリーの人が口火を切って自己紹介をすることによってもっと船の内で打ちとけ合ったのではないかと思う。
2. バズセッションの時、子供のために活動しているリーダーと青年のための活動（青年団）しているリーダーとに分れて行なった方がよかったのではないかと思う。

1つのグループの中にこの2つのリーダーがいれば、2つがこんがらがって話しがまとまらないと思う。

ライラセミナーについての感想

小田英夫

1. 講師の先生方の話がとても強く感銘に残りました。特に私個人としては、初日に高知大の秦泉寺先生に個人的にお話をきくことができたことは、大変な喜びがありました。また、学生時代に耳慣れた田中先生の講義をこのような場で聞くことができたことも、大きな感動の一つでした。
2. 兵庫県・四国の見知らぬ仲間に会えて、すばらしい友を得た喜びは忘れ難いものです。この仲間をいつまでも大切にしたいと思います。
3. 最初、深川先生から“時間の制約は最少限度に止め、あとはすべて君たちの自主管理にまかせる”ということでしたが、4日間を終えてみて、かなり制約がきつかったのではないかという気がします。
4. バズセッションのような、みんなで一つのテーマで話し合う場がもっとあればよかったのではないかと思います。

第2回ライラセミナーに参加して

西川誠一

3泊4日のライラセミナーを終えようとしている今、一番感ずるところは、参加する前以上に自分の中でボランティア活動・リーダーシップというものがうごめいていて、何が何だかわからなくなってきたことです。いろいろな講師や同じ立場の友達の言葉が断片的に思い出され、体中をはしりまわり、かけずりまわっていて、非常に複雑な心境。地区に帰り、ゆっくりと整理し、自分なりの解決策・判断をしてゆかねばならないと思います。

しかし、今回のセミナーは自分自身にとって、とてつもない非常に大きな問題を投げかけてくれたような気がします。

この感想を書いている今も、何か胸の中がすっきりせず、それがなぜだかわからない。このような気持になったのはこれがおそらくはじめてだと思います。

栗 本 啓 二

私は、セミナーに来る前にロータリーとかライラと言う事は、何もわからず上司と来ましたが、ライラに参加して、指導者としてと言うより、個人の精神面において勉強になったと思うし、こんどう言う時があれば参加したいと思う。

4日間において、私は人生の原点に帰ったような気がしますし、これからも初心をわすれずに行きたいと思うぐらいに反省出来た。

ライラセミナーで感じた事は、人と人との心のふれあいが一番はだに感じ、ここで知り合えた友だちとは一生おつき合いをしたい。自分自身、外国の事を考えたことがなかった様に思う。むしろ考え方としなかったのではないだろうかとも思う。ライラで勉強し、これからは身近の人から世界の人へと自分の持っている良い所(面)をより以上広げたいし、発展させたい。

一つ自分の気がおさまらない事がある。パズセッションの時間が短かすぎて、なんだかつまらない様な気がする。各人の話してリードして、時間にリードされてきたのではないだろうか?

私は最後に思う事、感じている事は、ライラと言うもの、セミナーと言う会をもっと多く回数をもち、数多くの人にわかってもらいたいと思う、そう言う様にしてもらいたい。

私にとって、4日間で人生の一歩前進したような感じです。

田 中 清 秀

普段は大学の関係に東京へ出ていますが、その間にロータリークラブから、卒業高校を通して親に今回のセミナーへ出席して欲しいとの連絡があったため、私自身こちらへ来る1週間前になってようやくこのセミナーがロータリーの主催であることを知った様ですから、今回のセミナーの主催目的などはロータリーアンの方もよくお分かりではなかったかと思いますから、こちらへ来ました。

指導者育成が目的のようですが、わずか3,4日では時間的にみて、あまり

多くのプログラムをこなせるはずはないと思います。

従ってこのセミナーを終了したからと言って、次の日から即立派な指導者になれる訳はないのですから、もう少し的をしぼったプログラムにならなかつたでしょうか。

例えば、講義や野外活動も確かに大事には違ひないとは思いますが、バズセッション中心のプログラムの方が、短期間の場合、私達にはより有意義であったのではないかと思います。

第2回ロータリーライラセミナーに参加して

片山修二

ロータリーの方々のボランティアの一部を見、又聞くことが出来たことは、私がB.Sに入っていたからだと思う。

又、意義のある講義を聞かせていただき、ロータリーの皆さんに御礼申し上げます。

又、より良いリーダー会をして下さい。

青木清児

各自リーダーの自主性というものが、時間というものに追われ、押し寄せのプログラムのみのセミナーとなった感がある。又、集まった人々は、ボランティア・社会人・学生と広い範囲に渡り、統一性に乏しいようだ。ただ、種々の人々と意見交換ができ、知り会えた事には大変な意義を感じている。諸講師、又ロータリアンの方々のお話は、今まで気づかなかった自分の内面を鋭く指摘され、考えさせられる事ばかりだった。

余島での4日間は、今後の社会生活を通じての始発点になったと考えるし、色々な人々と知り会えた事のよろこびは何ものにも代えがたい。

See you again ♪

Forever the beauty of Yosima

ライラ講習に参加して

国 安 義 浩

来るまではロータリークラブの主催だから多分ゆっくりしたスケジュールでのんびりとした講習を受けてくれればいいと思っていた。

入講してからは、ハイレベルな指導者養成を目的としているという主旨を聞き、又、講師の質の高さに感心して、何かすがすがしさを三島へ持って帰れそうな気がしております。

私なりに感じた問題点を書いてみます。

- ・自主管理の時間をもう少し増す。
- ・講習のテーマ及び受講者を限定する方がいいのでは。
- ・バズセッションがメインになるようなプログラムをつくる。
- ・各講習に対してセミナーであれば講師との意見交換を行う。

木 下 恵美子

ロータリーとは……なんて名前しからなかったけれど、紹介して下さる方があり、野外活動他講義を聞くのも好きな方なので、参加させて頂きました。

余島の美しい自然、気のいい人達との生活は、短かかったけれど良い心の休息が出来たと思います。

私は年長の方ですけど、十分な内容でしたし、若い方はもっと良い経験だった事でしょう。

私の希望として、もっとこういう機会を私達に与えて頂けるなら、喜こんで参加させて頂く事でしょう。

北野砂恵子

今、3泊4日のプログラムもほとんど終了しようとしている。この余島に4日前、はじめて足をふみいれ、施設・環境の良さにおどろいた。日頃活動している場と較べてしまい、もっとああすれば、こうすればと思いが広がった。

ライラーに参加して、豪華な講師陣、講師の方々の話に「なるほど」と思い、またあたらしいことを発見し、大変感動した。希望というか、残念に思ったことは、バズセッションが不十分なままでおわってしまい、ただ問題提起におわってしまったことだ。もう少し、じっくり煮つめた話をしたかった。

4日間を通し、素晴らしいと思ったことは、各地にいる種々なリーダーと知り合い、語り合って友情の輪がひろがったことだ。そして、この友情がいつまでも続くものと、私は信じている。

最後に、主催者であるロータリーの方々のさわやかな笑顔が印象に残っている。私自身、ロータリアンの方々のように、素晴らしい笑顔の持ち主となりたいと思った。

ライラセミナーを終えて

井上賀永子

海・山に囲まれたこのすばらしい環境の中で、昨日までは全然顔も見たことのなかった人たちと、3泊4日をすごせたことは、とても意義のあることだったように思います。

中でも感銘を受けたのは、秦泉寺先生のお話。引きつけられたように聞き入ったのは田中先生の講義。自給自足の味わった3日目の夕方。書ききれないほどの背中にジーンとくることがありました。背中にジーンとくるなんて、そうそうあるものではありません。この経験を明石に帰って、できるだけ多くの人に伝え、私と同じ感動を味わってもらいたい気分です。

小林孝子

青少年指導者養成セミナーであると、ライラの意味をたてています。確かに指導者としての本質を勉強してきたように思いますが、私にとっては、青少年の指導者としてよりも、人間としてまだまだ半人前の人間の人づくりのセミナーのように受けとられました。

ロータリーの奉仕の精神、指導者となるより以前の人間としてのあり方を人生経験豊かなカウンセラーの皆さん、専門家の先生方の講義からたいへんわかりやすく、再確認、または発見することができました。

特に先生方の講義は、なるほど、なるほどとうなづくことが多く、たいへんおもしろく受けさせてもらいました。

子供たちにとってリーダーというものが、世話好きな姉さん兄さんだけに終らぬよう、子供たちにとってリーダーとはどうあるべきなのか、どんな役割をにななければならないのか、まだまだ考えねばならないことが多いのに驚くとともに、ディスカッションによって問題点がよりはっきりし、考えやすくなつたように思います。

そして何よりも大きかったのは、この4日間で知り合った多くの人々、いろいろな人がおり、社会人とのふれあいが、社会を知らずに甘んじている学生の私にとって、とてもいい刺激となりました。

視野が広まる大きな友達・先輩・先生方ができました。

もうあと数時間でそれぞれ別々のものとの社会にもどりますが、このすばらしい出会いをうけられたことを心から感謝致します。

岡本尚美

ふとしたきっかけで、ロータリーという言葉も、YMCAという言葉も耳新しい私が、このライラセミナーに参加でき、各地域、青年団、ボイスカウトなどで活躍されているリーダーたちと交流をもて、このようにめぐまれた自然・

施設の中ですごせた4日間。ひじょうに有意義なものであったと心から感じています。

プログラムも、少しバズセッションの時間が不足で、全体での発表やそれに対する意見交流が心ゆくまでできなかつたことをのぞいては、盛りだくさんで、適當な自由時間もあり、まさに快適な4日間でした。

そして講師の先生方の一つ一つ考えさせられる、すばらしい講演はなによりもすばらしいものであったと思います。

私は今、自分の向上のためにしたいこと、知りたいこと、学びたいことでいっぱいです。そして、このことは逆にいうと、自分のことで手いっぱい、精いっぱいな状態であるような気がしています。これは自分自身を見失って流れてしまうよりはましかもしれないけれども、そこからボランティア精神の芽生える余地は見あたりません。それでいいのか悪いのか、自分は何がしたくて何がしたくないのか、何ができる何ができないのか、そんなことの私なりの答えを見つけたくて、そのことを意識してのライラセミナーも、今日の午後2時までとなりました。

そして今、心の中にまだ整理されないながらも、ある熱いエネルギーが、きっとこれから私のゆく方向をさし示してくれるししんとなることを信じています。

最後に、ロータリークラブについて、私は、ボランティアを目的としたクラブであるというのではなく、親睦を目的としたあるクラブが、できる範囲でやりたいボランティア運動をすい進しているのがロータリークラブであると解釈することで納得しました。

このようなすばらしいセミナーを企画されたロータリークラブの皆様に感謝いたします。

西 村 千 秋

私の所属するクラブは、VYSといって、これもボランティアの一つの活動となって行われているのですが、大学生活の中の活動だけに、月一回の施設訪問で、どれだけ私達の紙芝居や人形劇を楽しんでくれるか、そして子供達や老人

の方々と出会うことによってうまれてくる喜びをかみしめながら、活動範囲の限られる中で、今がんばっています。

このようなクラブの部長、リーダーとして、10月頃から、クラブをひっぱって来たのですが、その間いろいろ考えさせられることにぶつかりました。

しかし、今回のセミナーに参加させていただき、講師の方々のお話、現実にりっぱな指導者として活躍なさっている先輩方の話を聞いて、吸収するものが多くありました。と同時に自分を知る、見つめ直すいい機会でもありました。

これからもリーダーとして、多くの問題にぶつかると思うのですが、この3泊4日の経験を一つのブキとして、戦いに望んでいきたいと思っています。

三好ミチル

自分自身、ボランティア活動や奉仕の心 etc が全く理解出来ず……それは私自身、今勉強中の身で親のすねかじりである。その勉強している事の向上のためには、時間がたくさん必要なので、人のためにまで時間をさく事が出来ないから……と考えていた。

他の人は、それをどのようにされているのか etc を知るためというのが、ライラセミナーに参加させてもらう目的の一つでもあった。

ところで、この島に着いたとたんに感動したこと。ポストやかん板……ドラムカンを利用したバーベキューの etc 全て手作りであった。また4日間、いろんな事を聞き、いろんなものを見て……小学生の頃、国語で習った“しあわせの島”を思い出していた。本当にすばらしい島だった。はじめに書いた私の目的……わかったんです。自分自身の勉強しているものを生かせれば……と。私手作りの絵本つくるんです。一度持ってきて下さい。私、手作りのジュースやお花のお酒つくるの特技です。一度のんで下さい。

私、今の夢は、信州にペンション“ちるちるミチルの青い鳥の小舎”を建てる。全て手作りで……。同じようなペンションオーナーを目指す一人の男の子 H1 の子を知っている。彼は生れながらの足の不自由さをもっている。本当は寝たきりのはずが、自分の力で動かない足を松葉づえで持ち上げている。彼は自分が歩くことを“移動”と表現する。彼は現在、15回目の手術をうけ入院

中。右足と左足の長さがちがってきて、短い方を長い方に合わすという大変な困難で彼にとって苦痛の入院生活だそうだ。明るく、ぐれていらない寛大な心の持ち主の彼が手術前夜、はじめて見せた淋しくつらそうな顔。私はそんな彼を離島したら一番先にたずね、この島で生活したこと全てを彼に話そうと思う。彼、何て言うだろう……。きっと“行ってみたい”とも言うだろうけど、彼は来れない身なのである。彼とライラをつなぐ役目を私はかって出る事にした。私もちょっと寛大な心で帰れそう……ありがとうございました。



B・E グループ



カウンセラー

前田和穂

昨年第1回 RYLA のカウンセラーとして家内が奉仕させて頂き、その時の状況を非常に愉快で且つ感激深かったと熱っぽく語ってくれた時、それ程にも理解していなかった事を思い出しました。夫婦間のコミュニケーションですらこの様な事ですから、全く体験なく此の感激を口にする訳には参りません。

私共夫婦の間にも、この年頃位の青年が子供としてあっても不自然ではないのですが、不幸にも子供がありません。又、私の職業柄、若い人達と接する機会がありませんので、実は一度に此の様な多数の青年と寝起を共にして過す事に思考の次元が違いすぎて、とても共通の話題を見出す事が出来るのかと危惧致しました。然し、此処に集って来る一つのはっきりした目的を持った若い人の目は美しく、それぞれのはっきりした意見を交換出来る優秀な人達がありました。然し最初何のために来たのか、 RYLA そのものを全く知らない、心を閉じたままの人も何人かは居られた。彼らにもう少し話し合う時間があれば、もっと閉じられた心を開いてやれたものと思います。楽しく一諸に走る Jogging をするにしては、少し余島は狭かったと思いますが、この事によって少しでもグループ全体の意識が高まった事も事実だと思います。

カウンセラー

嘉納洋

四方を海に囲まれた素晴らしい景色と、美しい自然の溢れる瀬戸内の小さな島に上った第2回ライラセミナー一行の固い心を、ほんのりと色づいた紅色の桜の蕾が、ほのぼのと迎えてくれた事と思います。目を追う毎に、次第に花はころぶと共に、人々の心もお互の気持をほころばせ、そっと触れ合って人の出会いの大切さと、歓びを改めて感じられたのではないでしょうか。とかく横のつながりに支えられた人間関係が多く、縦社会に入るチャンスの少ない昨今の若い人達にとって、年令的なものだけでなく、生れ育った土地も、生活環境も、考え方も、趣味も、これ程バラエティに富んだ仲間達と共に生活出来る機会等そうあるものではありません。この素晴らしい出会いと場を、どう感じ、ど

う生かそうと考えて帰路につかれたでしょう。すぐに答えが出なくてもいい、きっといつか、この経験と喜びが何処かで役に立ってくれる事を願っています。充実した講義も、大先輩からの御話も、楽しい遊びもそれなりに感銘を受けられた筈です。しかしそれにも増して、人と人との出会いの中から何か心に残るものがあればそれを大切に心の糧としてこそ、このセミナーに参加された意義があった様に思われます。若者は若者なりに、中年は中年なりに、そして老年も老年なりに。

拙いカウンセラーとしましては、初回セミナーでは、受け入れる方も、参加者も共に初めての試みで、暗中模索の中で懸命に前進し、努力し、助け合って最後には、みんなが一つに盛り上って感激の内に別れを告げた様な気がしますが、2回目を迎えてあれも出来そう、これも出来そうと少々欲張った、余裕のないプログラムと、時々に、処々で融け込めなかった参加者を上手くコントロールして上げられなかった未熟さを痛感しています。

しかし、それぞれの持場に帰られて日も大分たちました。小さな不満は大きな歓びの蔭にかくれて、日毎のエネルギーになっている事を願いつつ、あの素晴らしい場を与えて下さったロータリーと参加して下さった若い方達に心から感謝して居ります。

伊藤 浩一

初日には、B.E合同の夜の話し合いで一言も発しなかった自分が、いまではグループの中で自分の思ったことを言うことが出来グループのリーダーからも帰ってきたことに、今回ライラに参加して一番うれしく思うことです。ボランティア活動をしている人達の中には、いろいろな自分の立場（学生もあり、養護学校の人もいて、社会人の人もいる）がありますが、その中で自分に出来ることか、他人を思う心は、どんな立場の人でも根本的なところでは同じであるという認識をして、今までの視野を大きく広げることが出来て、YMCAだけの自分の活動が、これからは自分の動ける範囲全てに扱んでいかなければならぬことを感じました。

個人的には、5日の夜を徹して話し合ったお互いを出し合ったことで、B.E

グループのすばらしい人間関係を改めて感じ、ライラに参加した人全て、特にB E グループの人達は皆いい人ばかりだと思います。この経験（関係）を帰つてからも続けたいと望みます。

片 山 淳

みなさんありがとうございます、なぜか書き始めに記したい気持になりました。

ライラセミナーに参加しないかと、ロータリアンの吉田浩一先生に誘われた場所は小豆島、それだけで2つ返事で参加をきめました。二週間程すぎたころ深川純一先生から「RYLA」の実施要項や「This is Rotary」が送られて来ました。読んでいますと、万年青年を自負しているわたしにも、青年の中に入つて行けるだろうか、2時間の講義についていけるだろうか。いろいろな不安が自分でも不思議なほどのってきました。若き時代の頃を走馬灯のごとく思い出し、四十年にして青年達の中に入つて試してみようと一つの挑戦の気持にもなり、4月3日6時40分の汽車に飛び乗った。「ウキ ウキ」とした気持も久しぶりで車窓から朝霧の丹波路も、なにか別世界にいるような心もちで神戸へ向った。

ポートタワーへ9時20分頃に着いた。余島へ行く人には一面識もない。時間待ちと、身の置き場に困り、食堂に入りうどんをすすり、早くライラセミナーのアナウンスをと耳を欹たせて待った。

いよいよ点呼、学生風の連中のなかに髭面で登山でもするのか、背後子を持った人（TOBAちゃんだった）、これにはびっくりした。

船中の2.3時間の長かったこと（自己紹介でもすればよかったかもしれないが、その勇気もない）。余島では自分から若人の中に入つて行こうと心した。

B グループでの一夜、若者たちは素直にわたしを受け入れてくれた。2時、3時と語り続ける連夜、3日間の最後の夜はついに朝までになったが、その付き合いは出来ずいつの間にか眠ってしまった。2時間の講義も国際的視野にたつて物事を見る、世界（地球）を基盤とした考え方、いつのまにか若く大きく脱皮していく自分を見たように思えた。

いろいろな人と語らい、キャンプファイヤー、歌の練習、炉辺談話、潮干

狩り、テニス、生れて初めてのディスコと若人の中にいる自分の幸せそうな姿を見い出し、感謝にたえない日々だった。YMCAの黃いシャツも思いきって着てAactのすばらしい感触にもふれられた。

このような自分自身をつくる事が出来たのは、前田・嘉納氏のすばらしいカウンセラーとB.Eグループの若人達に特に感謝したい、ありがとうございました。

話しも出来なかったA·C·D·Fのみなさんとは、次期に会える楽しみを残しよき仲間であって欲しい。

すばらしい企画に参加の機会を与えて下さいましたロータリアンの方々に感謝を申し上げ、お礼のことばとさせて頂きます。

樋 口 一 哉

RYLAセミナーに参加して、他のリーダーやボランティアの方々がはっきりとした目的意識・信念をもって活動していることがあり、感銘を受けました。というのは、自分がどれほど甘いか知らされました。それに、リーダーというのがいかに重要であり、難かしいか再確認させられました。参加は非常に消極的な形だったのですが、まだはっきり何かわかりませんが、得たことがあるようです。結局、RYLAに参加させてもらってよかったと思います。

竹 林 宏 倫

4日間本当にありがとうございました。

今回、このライラに参加させていただいたこと、いつまでも大切にします。僕はあと1年間YMCAでボランティアリーダーとしてお世話になります。あとわずか1年ですが、もう一度自分を見つめ直し、がんばりたいと思います。そして、このライラのすばらしさを後輩達に伝え、来年はひとりでも多くの後輩をこのライラに参加させてあげたいと今つくづく思っています。

そして社会人になっても、このライラで得た事を、そしてこのライラで出会

ったすばらしい友だちのことを、いつまでも忘れません。

人間って本当にすばらしい！ 今つくづくとそう感じています。

きっとまた会える日を信じて………

第2回 RYLA セミナーに参加して

福 住 一 彦

今、心を落ちつけて静かに目をとじると、ジワーッと熱い物がこみ上げてくる。こんな事は、最近の私の生活にはなかった事である。何年かぶりに命の洗たくをさせていただきました。人は、人生の中で時々このような、もう一度自分を見直す時間をもつ事が非常に大切であるという事を痛感させられました。日々忙殺されがちな心のもつある機能を回復させる力を RYLA のような人と出会い話をする会は持っていると思います。この貴重な経験は、本当にお金で買えない私の財産になるような気がします。

RYLA のスタッフの皆さん、メンバーの皆さん本当にありがとうございました。

第2回 ライラセミナーに参加して

高 橋 昌 弘

リーダーのためのセミナーということで参加させていただきましたが、リーダーとして広く世界について視野を向けるという問題意識の捉え方について、いろいろな講師先生のお話を伺い参考になりました。しかしながら、難しい世界状勢の中でありながら、平穏無事な私の現在の環境のもとでは、どうしてもその問題意識についても薄れがちな傾向にあるのが実際の状況です。いってみれば自らへの甘えの表われではないかと思われる訳ですが、やはり混とんとした世界状勢の中で、自己啓発を行ない、世界の動向を見極め、かつリーダーとしての自覚も高めていかなければならぬと思いました。幸いに、素晴らしい先生方や、仲間と知り合うことができましたので、その中に飛び込み、もまれ

て自分の内的な面での充実をはかりたいと思います。

人の出会いには偶然な面が多いと思いますが、いろんな方面の方々と一度に知り会えたことは大変よかったです。まだ語りつくせない面が多いのが残念でなりません。しかしこれからもずっとよい仲間でありたいと思います。

最後に、講師の先生方、ロータリアンの方々、カウンセラーの方々、O Bの方々、いろいろとお世話いただきましてありがとうございました。

第2回ライラ感想文

(阿南)伊勢達郎

昨日までつぼみだった桜が今朝は美しく咲いていました。

徹夜明けの頭にドッと感動がとびこんできました。

すばらしいです。「すばらしい」ということばを使わず、すばらしいことを言いたいけど、情けないことに文才のない僕にはこうしか言えません。

「いいぞ、いいぞ、いいぞ——。みんないい顔で、最高だよ。」

貯金して来年こそV.S.で来たいです。こんなすばらしいの2年も続けて参加者は阿南の他のリーダーに申し訳なくてしかたないです。阿南のロータリーの方、他の方を選んで下さい、今度こそ。

これからもガッツでチャレンジで命がけ、好きなこの道、できるだけ初心で心風にさらして、弱点風にさらして、ナガーグがんばります。これからもご指導を。

気付いた点、反省点書きます。

・最後までもう一息なんだけど、グループにとけこめなかった人がいて、僕は僕なりに考えて、相手のプライドとか面子にうったえ、なんとかしようと積極的に消極的な働きかけをしたのに、いろいろ理由はあるのだが、結果的に失敗で、その人たちはその人なりにライラをすばらしいものと感じ、熱くなって帰ってくれると思うが、異質な者どうしの啓発的な話しあいや、その他とにかくもっといいんだよって気付かせてあげたかって、くやしく情けないかぎり。

- ・昨年に比べちょっとライラならではの特色がうすれた。（他のリーダーシップ研修会のようになった感あり）
- ・時間が少しあわただしかった。
- ・いろんな参加者いればいるほど効果大だけど、それは異質という面でのことでライラがプログラミングの前提としているレベル以上の人選は、ある程度必要じゃないのかな——と、こんなのは大キライな考えだと思います。

加瀬 裕子

余島での4日間、とても充実した日々を送る事ができ、とても満足しております。人との出会いという物がいかに大切であるかという事もひしひしと感じました。キャビンでの自己紹介、歌、ゲーム、話し合い、とてもこれから的人生にプラスになる事が沢山あり、又講師の講義を聞いてこれからもっと学ばねばならないと痛感しました。キャンプファイヤーでのスタッフ、寸劇、合奏等皆で考え、共に楽しんだ事、一番印象に残ります。

いつまでも、この出会いを大切にしたいと思います。

松田 孝代

このライラセミナーに参加させていただいてほんとうに良かったです。たくさんの仲間ができ、その仲間と語り合う中で、又先生方、ロータリアンの方々のお話の中で、今の自分自身を見つめ直すことができました。私自身、ただ時間に流されて、自己満足の状態で終わっているのではないか、自分の立場ばかりで相手の立場に立って真剣に考えられなかったのではないか、など自己反省ができました。ただそれだけではなしに、仲間からの助言もいただき、帰ったらこうしようという決意も固まっています。このライラセミナーで学んだことを、これから青年団活動、サークル活動、ボランティア活動に役立てていきたい。ほんとうに貴重な4日間でした。ありがとうございました。

願わくは、ぜひもう一度参加したい。

水野美喜

この“RYLA”にいろいろな期待をして参加して、ほんとうにいろいろな経験ができたと思っています。“PYLA”に参加することがなければ、全く交ることのなかったであろうすべてのこのセミナーの仲間を、私の人生の中で交ることができたことも感謝します。人と言葉を交すことで一步づつ歩み近づくことのできることを体で感じた、大切な4日間でした。リーダーとして、またいろいろな立場の人間として、同じように悩みを持ち、希望、夢を持っているそれぞれの年令層の仲間達。ボランティアのはんとうのむづかしさ、つらさを、そして幸せや喜びを、仲間達と共に知り、学べたのではないかと思います。私は小さな田舎町のボイスカウトのリーダーとして、これからもしっかりやって行きたい。また、一人の町民として私の町がより良い町になるよう、役に立てるよう毎日を生活していきたいと思います。

ほんとうに“RYLA”に来て良かった。またチャンスがあれば参加したい。この4日間に得た私の経験を、私の町の仲間に分けてあげよう。そして、その仲と、また明日から、また一生懸命がんばって行きたい。

徳永子

何のレディネスもないまま、初めての島へ、初めて会う人達とのふれあいを求めてやってきました。お互いに何も知らなかった友と、こんなにすがすがしく充実した日々をわかちあうことができたことを心から感謝しています。「4月3日　ただ3日前の自分から一まわり大きくなった。」なんてことはまだ言えませんが、いつの間にか身についてしまっていたぎすぎすしたものや、自己中心的な考え方が洗浄されていくような爽快さを何度も感じることができました。“自分以外（or 自分の family 以外）は他人”という考え方から“友人だ”と思い始めています。

現在、小学校教員をつとめている上で何度か○○指導者講習会と銘うった合宿研修にも参加しましたが、即、明日から役立つテクニックの伝達に終るもの

が多いことを少しもの足りなく思っていました。ですから、講師の先生方の問題など大変だとは思いますが“指導者としての心構えとか高い境地を得ることに point をおく”という方針を今後 是非続けていただきたいと思います。

最後に企画運営のお世話下さったロータリアンの方々、講師の先生方、そしてこの余島の美しい美しい自然にお礼申し上げます。

RYLA セミナーに参加して

北添文子

私は、ロータリークラブ RYLA に関する知識はほとんどなくやってきました。でも“新しい出会い”に胸をふくらませていました。そして今、何か新しい力、勇気みたいなものが自分に充実感となって迫ってきます。

私は今までリーダーはどうあるべきかなど考えたこともあまりなかったけど、自分が主体的に取り組むすばらしさを多くの先生方、参加者から教わったように思います。

大学は衛生看護学科であり、教授からは機会あるごとに、看護方面で大学教育をする意味を話され、リーダーシップをとれる人材になることを要望されます。それに対して、私は自分の将来の方向性は悩んでも、リーダーシップ云々というようなことは、自分とは関係ないところのものであるように感じていた。

私の狭い見方に対して、各先生方から出される国際的視野や、他人がやってくれるのではなく、今現在若者がやらねばならない役割を聞き、私自身の事として捉えたいと思いました。

今、この感情を継続させること、そしてこの気持を一人でも多くの人に伝えたいと思っています。

—ライラセミナーを終えて—

穂 山 明 美

ライラセミナーに参加して、始めて RYLA と言う意味を知りました。リーダーとなり実際に子供達を指導を行なっている人や、いろいろな人の話を聞き、自分には考えてなかった少し考えさせられる面があった様に思います。講師の先生方の話で、子供を指導する場合に考えるべきこと、望ましいリーダーとはなどいろいろな話を聞き、うなづけることと、まだその様な経験のない私には考えさせられることがたくさんあった様に思います。

これからボランティア活動を行なっていく上で、今思うことは自己満足を主に行なうのではなく、心から「ありがとう」と思うような心のつながりを求めていきたいと思います。

この余島に来て自然の中で、色々な経験をすることができ、又学ぶことができ、友を得、楽しい四日間となり本当によい勉強ができた様に思います。これから歩んでいく上で役立てていきたいと思います。

ロータリーのことなど全然何も知識もなく、ただ何も知らないままやってきた私にとって、少しはロータリーのことも理解できた様に思います。

この様な出会いをいつまでも大切にしていきたいと思います。四日間どうもありがとうございました。

平 岡 啓 子

セミナーで一番よかったと思うことは、4日間でとても素晴らしい友達ができたことです。

小さな親切やあいさつから、あたたかい心のふれ合いが生まれると思っています。

今日の感激をいつまでも大切にして、明をく楽しい職場にしたいと思います。

1年ぶりで余島に来た時、なつかしさと嬉しさでいっぱいでした。なぜかホッとするのです。また、できれば来たいと思っています。

岡 本 牧 子

何度も消しゴムで消しては書き直したくなるほど、今、一時に様々な想いが胸にこみあげて来ます。それらの体験を通して、進路に関しての私自身の考え方の誤りを痛切に感じました。最も大切なことである“使命”というものを忘れていたようです。暗やみの中に閉ざされていた将来が、急に明るくなったように思えます。本当にすべての方に感謝いたします。

現在、人々の価値観が多様化してきていると言われますが、そのことが身にしみて感じられました。価値観の異なる数名が本音を出して話し合うことの意義、興しさを味わいました。

希望で胸をふくらませ大学に入学しました。それなのにいつのまにか私の心はくさっていたようです。今“何かをしなければ”という気持が心の奥底からグワーッとわきあがって来たように思えます。その“何か”は今はまだわかりません。しかしこれからもとの生活にもどり、その中でじっくり考えていきたいと思います。

すべての人々のことを考え、いつも脳と身体を働かせているような人間になれたらと思います。すべての人々ですからもちろん自分自身も含みます。私は自分自身が幸福にならずに、満足せずに、他人を幸福にするということはおかしなことだと思うのです。本当の幸福が何かということがわかったなら、奉仕することにより、真の幸福が得られるのでしょう。

私の好奇心を充分満足することのできたセミナーでした。ただセミナー中、私自身もっともっとおしりを軽くして動けばよかったと思っています。ここで得られた心の灯は何かのときの支えとなることでしょう。

この余島での交わりをここだけのもので終らせずに、もっともっと大きな交わりへと広げていけたらと思います。えらそうなことばかり言ってる私です。ずいぶんしらけた日々を送ってしまっていたようです。確かに、割合まじめに勉強し、活動していました。けれどいつも自分のためにしか働くとしていない私がいたようです。“なぜするのか”“なぜしたいのか”意義と使命観がないのでは死んでいるようなものですね。1日目の夜からガーンと大きなハンマーで頭をなぐられた思いがしました。今は喜びで心から笑えます。ありがとう♪

1980. 4. 6

C・F グループ



カウンセラー

江 藤 一 明

懐かしい皆様、お元気でお仕事に、又ボランティア活動に頑張っておられる
ことと存じます。ライラにご一諸させていただいて、たくさんの勉強が出来た
ことを本当によかったですと感謝いたして居ります。

ライラハメハメハグループのカウンセラーという大役、私には柄ではありませんでしたが、ベテラン高畠澄江カウンセラーのご教示と、グループの皆様方のお蔭で素晴らしい3泊4日のライラの思い出が出来たことを嬉しく思います。

講演オリエンテーションは勿論のことではありますが、夜のキャビンタイムにおける皆様のお話、ご意見は流石は青少年活動のリーダーの集まりだと感心いたしました。教育・恋愛、人生等の問題について夫々の立場で思い考へてゐる事をお互にぶつけ合いました。夜も更ける頃、若者は一つに打ち解け、友情の火は燃え、お互いの心を照らす、このライラセミナーの企画の大成功を感じました。

キャンプファイアではよくも短時間の間に纏めたものだとびっくりした。我がライラハメハメハグループの寸劇、踊りにハメハメハ王国の大王として出演させていただき生涯の想い出が出来ました。

第1日目の桜は三分咲きでしたが、第4日目は満開でした。ライラの成功を表わして居る様で帰る時そっと桜の花に唇を当てました。

皆様から頂いた心の温もりを、いつ迄も大切にしたいと思って居ります。本当に有難うございました。

「二段目の構築」

カウンセラー

高 畠 澄 江

第2回ライラセミナーの特質は、「再確認」の意味にあったのではないかと思う。「再確認」とは一つの静観的態度を養う事である。つまり「素晴らしい」の一語に尽きた第1回ライラを、丁度1年後、同じ余島で、同じ本質同じ企画の下に反復する事によって、「これでよかったのだね」と自分の中で静

かにかみしめる時期である。そこには華やかに燃えつきた第1回の炎とは別種の、ある種の静的な感動があった。より内なる深いものを見つめた感動である。それは言葉をかえれば、単なる感動と言う晴朗なるものの上に、一つのブレークとなるものを意識的に持ち込む機会であったと言える。つまり深い自己反省の機会である。

今年もまた若人達の鋭い直感と行動が私を捕え、彼等の友情が私を励ましてくれた。そして彼等のエネルギーが、私により深い内省を促してくれたのである。それらの内省を通して、あの余島の何処かに埋もれていた一つの真理を——昨年は見えなかったもの——今年の潮風は私に教えてくれたのである。

それはライラ活動に参加されるロータリアンの方々の「奉仕の執念」である。それは第1回ライラでは、「善意」とか「好意」、「友愛」、「情熱」などの尺度で映っていたものが、二段目の構築を終えた時には、「ロータリアンの執念」と言う言養に私の中で生れ変わっていたのである。当然、それらの「奉仕の執念」は私の心にも去年とは違った一つの刻印を残してくれた。華やかではないが、より重圧的な根源の重さであった。それはいずれ三段目の構築の時には、より深く確かなものとなって根を下ろすであろう。又一方、三段目、四段目の構築を計る時、そこには「つの固定化したかたちも又当然強化される事になる。出来上って了ったかたちは屢々人間を縛り、不自由にさえするものであろう。

高く高く、ロータリアンの手から若者達の手へと手渡たされてゆく「真理の旗」が、一つの輪を確実に描いてゆくのを眺めながら、又その輪が空の青さの中にやがて吸われて行くのを仰ぎながら、私も又歩き続けずにはいられないのである。

夏近い瀬戸内の海辺より、余島で出会ったロータリアンの方々へ、多くの元気な若人達へ、心からの感謝をこめて一つの言葉を送り度いと思う。

「あゝ！ 長い旅 そして旅宿は見つからず、夜が近づいて体は冷えております。けれども道伴れとしてあなたとご一緒なら、私は満足で幸せになります。………… あなたを知ったことは聖書以上に、私に、われわれの不滅性を感じさせてくれます。」

(メルヴィルより
ホーソンへの手紙から)

「ライラセミナー」に参加して

(西宮) 流郷俊夫

4月3日～4月6日、好天の中での本セミナーに参加して意義を持ったのは、
①各ボランティアの活動母体の紹介と理解を求めることが出来たこと。

友情の継続 各団体への自主的参加可能

同窓意識 オールラウンドの活動者となる

生涯の友となる 各地域活動の輪へ拡げる

②リーダーとしての自我の確立へのヒントを獲得したこと

世界的視野に立脚した自分の方向性を定めるきっかけを得る。

③ロータリークラブへの誤った先入観よりクラブの性格・目的が明確に理解出来たこと。

であり、今後の自分自身の人格形成の中での1ステップが計れたことと、リーダーとしての今後の活動への展望がわずかながらも見え出せたように思う。

片山正人

私は第2回ライラセミナーに参加して、各地に、方法は各団体とも違うけれども、同じ目標に向かって活動を続づけている多くの仲間たちがいるということを強く感じました。その仲間たちとの3泊4日の間、時には真剣に語り合い、時にはレクリエイションで汗を流し合い、心と心がかよいあう、コミュニケーションをとることができました。そしてまた、講師の方々が実体験をもとにした講演をしてくださるので、聞いている私もそのお話を肌で感じることができました。また、このセミナーの特徴である自主管理の中で自分の意志によって行動することができたので、仲間たちやロータリアンの方々とも十分に話し合える機会が得られた事は、参加したすべての人々にとって、非常に有意義な時間だったと思います。3泊4日の短期間ではありましたが、目標を同じ

くする多くの仲間たちとの語らいは、これから私が生きて行く上での大きなエネルギーになるでしょう。

最後に、ライラセミナー開講にあたってご苦労をおかけした先生方、親身にお世話くださったロータリアンの方々、またこのセミナーに参加されたすべての方々に深く感謝いたします。

永井威志

当初、このライラセミナーの意図について全くわからないまま参加したのですが、1日2日とたつたびに、このセミナーが非常に重要なものであるということがわかってきました。ただ2、3もの足りなく感じたことは、このセミナーの参加者は、各地区のリーダー格の者たちであるので、もっと自主性を重視し、自由時間などを増やしたらどうか?ということと、班ごとに活動を行なってきたわけですが、この方法では話し合うことができる人がきまってしまうのではないか?ということです。こういった不満もありましたが、とにかくこの4日間、非常に充実した日々であったように思えます。

(明石)池田 実

「今回のライラでできた仲間で何かをやっていきたい。この23名の輪を地道に拡げていきたい」 今、私の身体中でこうした思いが熱く渦巻いています。これをひとつひとつ具体的に実現していきたい思いでいっぱいのが、今の実感です。

こうしたひとつの出会い、きっかけを作って下さったロータリーの方々に感謝すると同時に、これから私たちの仲間の活動に注目していて下さい。

きっと何かをやると確心しています。

(淡路)阿 部 員 久

今回のライラセミナーに参加し、今までの各種指導者養成セミナーになかった真新しい指導者としての心構え、人に接する心遣いの重要かつ必要性を知った。

色々な団体のリーダーより、状況、その問題点等を心底から話し合い、広い視野を開くと同時に、今後自分の歩むべき方向づけが出来たように思う。

このセミナーで得た貴重な体験の数々を糧に、地域社会においても他人に社会に必要がられる自分を型成して行きたい。

加 藤 文 紀

私がこの第2回ライラに参加する前に人から聞いたりして考えていたことは、ライラとは色々な人々が集まり、研修会でありながら毎夜酒を飲みまことに不思議な研修会である。私は実際遊びにでもいくような気持ちで参加した。確かに色々な人が参加していた、職業もいろいろ、活動もいろいろ、私が考えてどうしてもこのセミナーと結びつかないような人まで、おどろくばかりの巾の広さである。毎晩毎晩酒も飲んだ、しかし遊んだという感じはない。ほんとうにためになる研修会であった。これは講師の先生方によるところが非常に大きい。秦泉寺正一先生はじめ、私たちが普段接することのできない、すばらしい先生方であった。話の内容は、明日からの活動にすぐに役立つ技術うんぬんというようなものではなかったが、それよりももっとすばらしい、私が1人のリーダーとして、人として何か一まわり大きくなるための肥料を与えられたように思う。もしこのライラのプログラムにおいてこのような講演がなかったら、私はきっとああ楽しかったなと思うだけであろう。

もう一つのライラの大きな目的、友達作りはどうであったろうか。色々な人々と酒を飲みながら色々な話をした。バカ話もした。真剣に討論もし合った。

しかし、ほんとうの友達、仲間ができたろうか。1日目の夜から「去年はもえた、友達をつくらなければ、夜を徹して話をしよう」これでよかったのだろうか、友達、仲間とはそのようにしてできるものであろうか。ほんとうのグループ仲間とは、いろいろなプログラムを通してグループの人々と接して言葉をかわし、話がすすみ、気がついたら夜を徹していたというようなものでないのか。最初から誰が誰だか名前もわからないうちから「友達ダ仲間ダ、あなたたちは仲間にならなければならないのだ、後で同窓会をしなければならないのだ」何か変だ、どこかがおかしいように思う。確かに気の合う人もいた。又後で会いたいなと思う人もいた。しかし何かのせられたような感じがする。第3回のライラに参加するロータリアン、O B etc、第2回の受講生の中でこのように感じた変りものもいたということを覚えておいてもらえば幸いである。最後に私はライラに参加してほんとうによかった。よい講義も聞くことができた。よい仲間もできたように思う。ほんとうに有難うございました。

姜 進 仁

RYLAに参加できることは、大変光栄だと思っています。そして、先生方の貴重な、そして経験上の話をきき、大変勉強になりました。将来一人のリーダーとして、今日のライラでまなんだことをいかし、青少年のため、そして社会のために頑張りたいと思っています。

★ 自由時間がほとんどなくて、余島の囲り及び環境をもっと知りたかった。

齊 藤 正 幸

人と出あい
神と交わり
愛の火の
もえるところ

友と出会い、友情を確かめあったこの4日間、自分にとってすばらしい時であった。この研修で学んだことを一つの区切りとして、また出発点として、微点ではあるが着実に仲間と歩いていきたいと思う。

ライラセミナーに参加して

野村浩平

私は3月31日に役場のほうから、このセミナーに参加しろと言われて強制的に参加しました。3月19日～3月27日まで第3回B&G「若人の船」に参加し、船と飛行機によるマニラ・香港研修を終えて帰ってきたばかりだったのです。その船中研修によりリーダーとはどんなものかと言うものがはじめておぼろげながらわかってきたのです。若者どうしの大集団の中におけるリーダーの役目、これは非常に難しいものだろうなあと感じたのです。

このセミナーに参加してリーダーの役目の難しさ、大切さというものが改めて痛感しました。しかし、今の自分はリーダーになる職務を持っている（社会教育課）のに、この四月に、税務課から移ってきたばかりで右も左もわからぬいという現状なのです。

班・組の内の討論で、先輩リーダー達の苦しみを聞き、話し合った中で、頭の中で考えていたものと、実際のリーダーとの違いを修正し、その既ようを知ることができました。また、諸先生の講話を聞き、リーダーの心がまえ、人間としての生き方を教えていただきたいへん勉強になりました。

ロータリーの“自己鍛錬による精神的・社会的向上心・行動力を得る”という目的は社会の中で生き、人間としての役目をズバリついており大賛成です。

また、リーダーの自己研修の大切さをよく知ることができ、ありがとうございました。

松 下 正 義

青く澄んだ空、その中に時折顔を出している雲。
鏡のように映しだす海、その中に時折白い牙をむいている波。
単調な風景の縁をやぶる島が見えた。
少し加えれば壊れてしまいそうな cabine じゃなかった……。
十年ぶりの小豆島ましてや余島なんて地球上に存在するなんて知らなかつた。
あまりこの何日かセミナーにでても、ロータリーのことばは勿論、ボランティアのことばはっきりいって一諸になってしまつてゐる。少なくともこの私には。
まあ酒は好きな方だから、毎日飲めたのはいいが……。

＜あとはなし＞

Sound of Silence

片手でたたく音がきこえない……きこえる？

What's sound of one hand clapping?

(松山) 小 沢 五 郎

最初にまず一言。「来て良かった。」正直言つて、このライラ参加は全然気が進まなかつたのである。ロータリーとかライオンズとかの名前程度は知つてゐたが、その内容に関する知識はゼロに近かつた。このような者がいきなりライラに参加して何ができるのだろうかという不安・心配でいっぱいだった。

しかし来て良かったと今はつくづく思う。楽しくて、又ためになる(あるいはためになるであろう)講義も良かったが、何といつても見知らぬ人達と友達になれたことである。最初の日こそ、少々ぎこちない気持だったが、すぐに皆とうちとけることができた。

特に、キャンプファイヤーのためのスタンツや歌の練習の時は、笑いの連続でとても楽しかった。連夜、遅くまで話がはずんだこの数日間はいつまでも胸に残ることだろう。

いっしょに学んだ皆さん、又多くの関係者の方々、本当にお世話になりました

た。又、お会いできる日を楽しみにしています。

グッバイ、アロハ、そしてハメハメハタ

田 中 規 雄

4月6日、気がついてみれば、今日がロータリーライフ研修の最後の日である。しかしなんという時の流れの早さでいい。アッという間の4日間だった。私は、実はこの研修に参加するにあたって、正直多少不安があった。足が少し不自由で、松葉杖歩行をしているからだ。

こんな身体で60名の元気な人達と一緒にやっていけるだろうか?

そして4月3日初日。私の不安は倍加した。

元気な皆が喜ぶ自然環境を生かしたこの会場が私には鬼の島にも思えたのだ。私はリーダーの研修どころではなくなってしまった。

どうやって皆に迷惑をかけないようにするか。どうやって皆についていくか。そればかりが頭の中に入っていた。

不安はつのるばかり。やめられるものなら、すぐにでも田舎に帰りたかったほどである。

しかし私はもうこうなったらどうとでもなれと、あきらめのような一大決心をした。こうなった以上、私自身が皆にどこまでついていくことができるか、ためしてみようと考えたのである。

この4日間、私は精一ぱいやった。自慢なんてさらさら出来ないけど、とにかく精一ぱいやった。かなり自分でも無理があったことはわかったが——。その結果、私はなんとすがすがしい気持ちになったことだろう。

今こうしてふりかえって、私は精一ぱいやったという満足感でいっぱいでした。こんな幸せな気分はない。

一つだけ心を静めて考えてみると、

私は、障害者には障害者のスピードがあるということを、皆に知ってもらうべきだとも考えていた。

百 井 良 仁

何か一つでも自分のものにしようと思いながら来ましたが、なかなかレベルが高く思うようにわかりませんでした。

このセミナーを土台にしてリーダーになったときには、何かの役にたつようになりたい。

3泊4日のセミナーでたくさんの人と出会い、たくさんの友人ができたのも一つの収穫である。

なかなか楽しい3泊4日でした。

内 海 洋 美

4日に友だちから（木村さん）指導者養成セミナーがあるからいかないかとさそわれた。彼女が声をかけてくれなからったら、このすばらしい体験はなかつたととっても感謝している。

日常はヤマハ講師で子供とその母親と仕事仲間のほとんど女性ばかりの中で、幼児期に音楽を通して、人間形成の一端でもつくれたらと思いながら仕事をしています。でも、外への目はなく、ここへきていろんな職業の人とまた男の人の立場、女性の立場の違いなど、いろいろ話ををしてとてもすばらしい体験ができた。またプログラムの講師の人たちのとてもすばらしい体験、又指導者としてetcなど、今までずいぶん一人前のつもりでいたけど、まだまだ自分など、社会的には半人前であることを痛せつに感じました。高松へ帰ったら、YMCAに入会して活動したいと今決意しています。それからずいぶんすてきな友情を友としりあえたこのセミナーに感謝しています。

第2回ロータリーセミナーに参加して

藤本桂子

心の中にまだ形をととのえない、渦まくような思いがある。このライラセミナーで、こんなにも自分の心みたされる講義と、経験を得られるとは考えもしなかった。本当に来てよかったです。参加させていただけて幸せだったと思う。

今、非常な充実感にひたっていると共に、これからちどのよう自分の力を地域に及ぼせようかと、意欲の湧きたつのを感じる。諸先生、諸先輩方、これからも私達にご助言とご指導をお願い申し上げます。

時間に追われてまとまりませんが、お世話いただいた高畠カウンセラーはじめ、皆様に心からお礼申し上げます。

—RYLA SEMINAに参加させていただいた—

竹崎桃子

養護施設で住み込んで子供達と日々起居している自分にとって、子供達の人格形成の場である事を考える時、ある意味で全人格的なものを欲求されるのに、こんな自分、もっと自分をみがきたい。生きる力としての精神的栄養を求めたい♪と思ってる所に、こういった機会を与えて下さった事に感謝です。本当にありがとうございました。

いろんな人と出会いたい♪ いろんな自分を発見したい♪ 自分達の前をみて生きて行きたい♪

おうおうにして断片的・水平的思考をしがちな自分に、広い意味での視野を広げさせて下さり、物の見方・考え方を示して下さった先生方の生きざまをみせていただけた事は自分にとっての大きな刺激でした。

ロータリーとしての取り組み方についても、治療よりも予防を重要視される事にあるべき姿をみさせていただいた様に思っています。

キャンプファイヤーの夜、薪は燃え尽きてしまうと灰になる事を知ってても尚かつ火をともしてるというお話をとても印象的でした。

ともかく、ここでの友情の火をたやさず、思いを尽くし心を尽して、はっきりとみる物をみて、架空の世界にだまされないで、ノロノロとでもいい精一杯大地を頼って生きていきたいと思っています。縁の下の力持ちとして支えて下さった方々、直接お礼も言えないまま帰りますが、本当にありがとうございます御座居ました。

第2回ロータリーライラセミナーに参加して

川 辺 美 幸

私は、短大のVYS部に加入していて三原先生の紹介で今回のセミナーを受講することになったのですが、ロータリークラブ等の組織等を全くと言って良いほど理解出来ていませんでしたので、大変不安な気持ちで参加させていただきました。

セミナーで各リーダーの方たちの意見を聞いていますと、書物で得た理解などは、実際の場ではあまり役に立たない様に思いました。経験をつみ重ねていくことが一番良いことが分かりました。身をもって体験することによって、いろいろな問題が出てきてそれをどのように解決していくかを考えていく。そこにリーダーとしての意義を見い出せるのではないかでしょうか。

今回のセミナーは、私にとって大変勉強になり、今度の勉強につなげていきたいと強く思いました。

まだまだ理解出来ていない私ですが、勉強と経験の中で自分をみがいて、良き指導者となり愛をもって接することが出来る様努力したいと思います。

近 藤 弓 子

今回も、セミナーに参加した訳ですが、やっぱりよかったです。またたくさんの人と会えて、これからもこの出会いをたいせつにしたいです。

内容としては、第1回と比べて時間的におちつかないような気もしましたが、逆に第1回のときが、時間的に自由だったからかもしれません。

第1回のときも参加することに抵抗があったのだけれど、今回のほうがより以上に考えてしました。というのは、私自身、この一年間に何の進歩もなく、自分自身ではすごく洗練されたっていう気持ちもありましたが、それが自分自身でしかわからていなくて、ほかの人にこの気持ちを伝えることができなかったのです。それではライラの意味がないような気もします。何か手伝えることがあれば………と思っていたけれども、あまりやくにたたなかったり……

それでもやはり、第1回研修生の人たちと再びあえたということや、新しい出会いができたということはうれしいと思います。

山 下 八千代

このライラセミナーに参加させてもらって帰る今となって思うことは、有意義な4日間だったということです。

この余島に来るまでは期待と不安で一ぱいでした。でもきてみて、4日間をすごした今、早かったなと思うと同時に、なんかずーと昔からいるような気になりました。

それというのも、大ぜいのみなさんと友だちになり、親しくしてもらったからと思います。こういう機会を与えられたということは、私にとって大きいことだったと思います。これからは、この仲間を大切にして視野を広げていきたいと思います。

講演も、めったにきけないような話を聞かせていただいて、ほんとうにありがたく思っています。

この場所が島であったことも大変よかったです。海を見て、山の中を歩き、なんか心が広く美しくなったような気がします。また機会があれば、友だちなどともう一度ここを訪れたいと思います。

月曜日から、ここで学んだことをきかしてがんばっていきたいと思います。ここでの生活が、わたしの活力となったようです。ほんとうにありがとうございました。

塚 本 久美子

セミナーに参加させていただき、ほんとうにうれしく思います。色々な経験を通して、各種団体のリーダーが集い、こんなにも充実した日々がおくれた事は、ほんとうのところ、これが始めてではないでしょうか。話し合いの中で残されている問題は、まだまだ数知れないほどありますが、淡路へ帰り、又頑張ろうという気持になっています。熱いうちを大切にやって行きたいと思います。ありがとうございました。又、スターになってしましました。

ハメハメハ。

生 活 の 断 片



G. S. E 訪問



記念植樹

第2回ロータリーライラセミ

1980.4.3~4.6



キャンプソングを練習



さあ出発！



さよなら余島



ファイアーソの薪
1回生の力作



オープニング パーティー



採集した野草や貝で……
献立はなに？



RYLA會長さん！



野外料理

第2回ライラセミナー運営委員会

R.I 第 267 地区	ガバナー	中 島	源 (小松島)
直前ガバナー		梶 浦	一 (松 山)
青少年委員長		宮 崎	道 生 (松山東)
		佐 藤	功 (高松南)
		江 藤	一 明 (小松島)
		吉 本	功 (高知東)
R.I 第 268 地区	ガバナー	多 胡 檀	裕 (姫 路)
直前ガバナー		執 行 孝	胤 (西 宮)
R Y L A 委員		深 川 純	一 (伊 丹)
		今 井 鎮	雄 (神戸西)
		高 木 正	徳 (垂 水)
		田 中 健	一 郎 (神 戸)
		山 村 徳	太 郎 (西 宮)
		橋 本	勲 (伊 丹)
カウンセラー		江 藤 一	明 (小松島)
		三 原	寿 (北 条)
		前 田 和	穂 (垂 水)
		高 畠 澄	江 (川之江)
		嘉 納	洋 (神戸東)
		林	真 紀 (須 磨)
		前 田	美 智 子 (垂 水)
ロータリアン参加者 267 地区		細 谷 誠	宏 (小松島)
		吉 本	功 (高知東)
		黒 河	稔 (東 予)
		大 谷 謙	三 ("
		山 崎 陸	史 (丸亀東)
		都 築 弘	義 ("

他小豆島ロータリー多数

268 地区 森 田 耕 平 (神戸東灘)
橋 本 正 夫 (神戸西)
今 津 成 生 (")
平 尾 登 (篠 山)
高 澤 哲 三 (")
松 岡 嘉 男 (神 崎)
堤 一 枝 (神戸 YMCA)
吉 村 圭 子 (ガバナー事務所)
道 智 千 佐 子 (")
京 極 美 栄 子 (神戸西 R.C 事務局)

あとがき

第2回 RYLAセミナー ディーン

深川純一

第2回 RYLAセミナー報告書が完成致しました。

顧みますと、『Try and Error』でふみ出した第1回セミナーをふまえての第2回セミナーでありましたが、やはり、運営面において、まだまだ反省すべき点が多くあることを感じました。これを今後の糧としたいと思います。

来年の第3回セミナーも、今井先生の御指導の下に、第1回 RYLAを企画するにあたって先生が構想された基本的な軌道をはずれないようにして、改めるべき点があれば修正して行きたいと思っております。

そして、RYLA将来の展望を考えるとき、第2回セミナーを終えて私達は今、次のステップを考える時期に来ていることを感じます。

今井先生は、RYLAの発展と地域社会との関連において、既にセミナー修了者の同窓会を結成すべきことの必要性、そして更にその人達の Advanced course としての Training course を企画すべきことを示唆されております。

また、先日の RYLA 委員会において、今井先生から一つの嬉しい報告がありました。それは、第1回 RYLA 修了者である松浦龍司君達が核となって、篠山 R.C、柏原 R.C の後援により、地域の RYLA ともいべき "郷土を考えるセミナー" を三泊四日の日程で開催したところ、RYLA と同じく大成功であったということです。

これは、地域社会に一つの小さな "心の波紋" が生れたことを意味します。この小さな波紋は、やがて大きく拡がって行くことでしょう。私達は、湖水に降る雨の波紋のように、地域社会にこのような小さな波紋がいくつもいくつも生れては拡がって行くことを願ってやみません。

末筆乍らこの報告書発刊に当り、懇切な御指導を賜りました今井先生他 RYLA 委員の皆様方、原稿を寄稿下さった講師の先生方ははじめ RYLA 参加の皆様方、テープ起しや原稿作成等面倒な仕事を心よく引受け下さったカウンセラーの嘉納洋さん、林真紀さん、ガバナー事務所の渡辺圭子さん、そして、編集全般について渾身の御尽力をいただいた神戸西 R.C の京極美栄子さん、これらの皆様方に対して心からなる感謝と敬意を捧げてこのベンを擋きます。

以上



昭和 55 年 4 月 3 日～6 日

主 催 R.I 第 267 地区
R.I 第 268 地区

ライラ運営委員会

開催地 西日本青少年野外活動センター